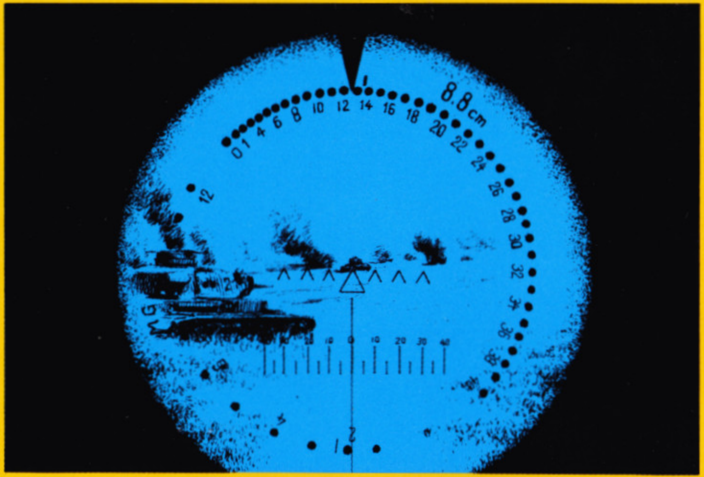


SystemSoft

イラスト：小林源文

第二次世界大戦シリーズ
（ブリッツクリークⅡ）

PanzerKeil

パンツァーカイル

解説ブック

SystemSoft

ヒストリカルノート

I 戦争への序曲 1938～39年

政権を掌握した1933年以後ヒトラーは、第１次世界大戦の敗北によって失われた旧ドイツ領を回復するための行動を次々と展開した。1936年非武装地帯とされていたドイツ西部のラインラントに進駐、1938年２月にはオーストリアを併合し、チェコスロヴァキアにもドイツ系住民の多い国境沿いのズデーテン地方の割譲を要求した。

これらの行為はヨーロッパの緊張を高めていったが、特にズデーテン地方をめぐってドイツとチェコスロヴァキアの関係は戦争寸前にまで悪化し、ヒトラーは参謀本部に対チェコスロヴァキア戦の準備を命令した。戦争が始ったならチェコスロヴァキアの同盟国フランス・ソ連が介入すると予想したドイツ陸軍首脳は、再建途中のドイツ軍には対チェコスロヴァキア用の戦力しかなく、介入への対応策を取り得ないとして戦争に反対した。しかしヒトラーは諸国がチェコスロヴァキア支援の行動を起こすことはないと考えて強硬姿勢をくずさなかった。

ソ連のヨーロッパ進出をドイツの拡大以上に恐れるイギリス・フランスがソ連のチェコスロヴァキア救援についてのアピールを無視し、独自に外交交渉で問題の解決をはかったため、事態はヒトラーの予想通りに展開し1938年９月、ズデーテン問題についてのミュンヒェン会談が開催された。会談ではヒトラーがズデーテン地方が最後の領土要求であると言明したこともあって、英仏両国はヒトラーを支持し、チェコスロヴァキアにドイツの要求を受入れるよう求めた。友好国から見捨てられたチェコスロヴァキアはズデーテン地方をドイツに割譲することに同意した。

ミュンヒェンでの外交上の勝利は、英仏が以後も宥和政策を取るとヒトラーに確信させ、旧ドイツ領の回復との政策をはるかに越える行動を実行させた。1939年３月にドイツはチェコスロヴァキアを分割し、首都プラハをふくむボヘミア・モラヴィアを保護領として当時世界第２位の規模の兵器産業を手中にし、チェコスロヴァキア領の残部に傀儡国家スロヴァキアを成立させて自国の影響下においた。

ドイツはまたポーランドにも旧ドイツ領ダンツィッヒ地区の返還を要求したが、チェコスロヴァキアの消滅以後ドイツとの対決姿勢を明確にした英仏の支援を受けたポーランドは、ドイツの要求を受入れなかった。

ヒトラーもダンツィッヒが交渉によって回復されるとはもはや考えなかった。４月には参謀本部にポーランド戦計画「白の場合」の立案を命じ、戦争をより安全に遂行するためソ連

との交渉を秘密裡に開始した。8月25日にはポーランド分割の秘密条項を含む独ソ不可侵条約が成立した。

ヒトラーはソ連との同盟によって英仏の干渉を排除し、戦争を対ポーランドの局地戦に押えることができると考えて8月26日の開戦を予定していた。だが25日にポーランドが英仏と相互防衛条約を結んだことから、開戦は急遽延期されることとなった。このため臨戦体制にあったドイツ軍は待機状態へと戻ったが、開戦延期の連絡が遅れたため一部の部隊が国境でポーランド軍と交戦した。交戦は短時間だったが、この事故で戦争を有利にする奇襲が不可能となり、ポーランドの戦備を急がせることとなった。

戦争が切迫していることは誰の目にもあきらかだったが、それでも8月最後の一週間、各国は妥協点をもとめてぎりぎりの外交交渉を続けていた。ドイツ・ポーランド交渉の最後の試みが失敗に終った31日の夜、ドイツ軍部隊に攻撃命令が与えられた。

9月1日早朝ドイツ軍は国境を越えて各所でポーランド領内へ侵入した。9月3日英仏はドイツに対して宣戦布告を行ない、戦火はヨーロッパ全土へと拡大してゆくこととなった。それは史上最大の戦争、第2次世界大戦の始りででもあった。

II 電撃戦　1939～40年

◆II－1　征服　ポーランド 1939年

ポーランド軍の戦略は英仏との軍事条約を前提とした持久戦だった。条約により英仏は軍の動員後ドイツ西部を攻撃するが、その時点までポーランドにドイツ軍の主力が釘付けのままならば、連合国軍の攻撃は簡単に成功してドイツを敗北させるだろう。また最悪の場合でも英仏の参戦がドイツの戦意を低下させて休戦交渉を可能にする。いずれにせよ連合国の支援を背景として、ポーランドは自国に有利に戦争を終らせられる。ポーランド軍はこのように考えていた。

連合国軍が攻撃を開始するのは開戦二週間後になると予想されたので、それまではドイツ軍を阻止せねばならなかった。このためポーランド軍の作戦計画では兵力の大部分がダンツィッヒ地区を含むドイツとの国境地帯に配置され、後方にはわずかな予備だけしか残されなかった。

ドイツは逆に短期決戦を望んでいた。ドイツの産業経済には長期戦への備えはなく、東西での二正面戦争を避けるためにもポーランド軍を早期に殲滅せねばならなかった。このため対ポーランド作戦「白の場合」には2個軍集団が投入され、北方軍集団が東プロイセンとポンメルンから南下、シュレジエン及びスロヴァキアから北上する南方軍集団とワルシャワ地区で合流して、ドイツ国境とヴィッスラ河の間でポーランド軍を包囲殲滅することが目標とされていた。

9月1日早朝、ドイツ空軍がまず出撃した。悪天候とポーランド空軍の後方退避のため当初の戦果は芳しくはなかったが、優勢なドイツ空軍は数日のうちにポーランド空軍を圧倒して制空権を奪取した。

地上でもドイツ軍は有利に戦いを進めていた。単純な兵力数ではドイツとポーランドには大きな差はなかったが、数個の装甲師団の存在がドイツ軍に多大の優位を獲得させていた。この時期、ドイツ装甲師団の戦車の大部分はI号、II号といった軽戦車でしかなかった。だがポーランド軍は有力な対戦車兵器をほとんど装備しておらず、歩兵は戦車が現れただけでパニックを起こして潰走した。中世以来の伝統を誇るポーランド騎兵は槍を掲げて戦車に襲撃をかけたが、それは勇敢ながらも自殺行為でしかなかった。

短時間でポーランド軍は撃破され、退却する部隊は空襲に統制を失い敗残兵の集団へと変っていった。ドイツ軍は敗残兵を追いかけるように進撃を続け、開戦後一週間で北方軍集団がダンツィッヒ地区を占領してヴィッスラ川沿いにワルシャワに迫り、南方軍集団の装甲部隊がブズラ川に進出していた。9月9日には第4装甲師団が南からワルシャワ郊外に到達した。ワルシャワ市内への攻撃はポーランド軍の激しい抵抗のため戦車57両を含む損害をだして失敗に終ったが、この進撃によってヴィッスラ河西方のポーランド軍はワルシャワ以東から切り離されて孤立し、2個軍集団のあいだに包囲されることになった。

ポーランド西部に孤立したポーランド軍は数日にわたる戦闘と空襲で戦闘力を喪失していたが、国境の最西部に布陣していたポズナニ軍だけは攻勢線からはずれていたため戦力を保持していた。ポズナニ軍は敗残部隊を吸収しながら空襲を避けて夜間に後退を続け、9月9日にヴィッスラ河とブズラ川の間クトノ地区で、ワルシャワへ脱出するために反撃を開始した。攻撃を受けた南方軍集団の第8軍には薄い封鎖線を引くのがやっとの歩兵4個師団の兵力しかなく、ポズナニ軍の攻撃に数箇所で退却を余儀なくされた。

ポズナニ軍がワルシャワへ脱出することは包囲作戦を失敗に終らせるばかりか、ワルシャワ前面で戦闘中の軍の補給線をも危険にさらすことを意味していた。南方軍集団はこの状況に対処するため、装甲部隊をワルシャワからブズラ包囲網へと移動させ、空軍も使用可能なすべての機体を投入した。

ドイツ軍がブズラに戦力を集中したため9月13日にはポズナニ軍の前進は阻止されたが、ポズナニ軍は短時間で部隊を再編成してワルシャワへと突破をはかった。以後も数日にわたってブズラ包囲陣では激戦が繰広げられたが、包囲された歩兵9個、騎兵3個師団、それに10個師団分の基幹部隊のうち、包囲から脱出できたのはごく少数の兵士だけでしかなかった。

ブズラ包囲戦の終末は、同時にポーランドの軍事力の終末でもあった。また連合国も軍の動員が終らなかったためポーランド救援のための行動を起こしはしなかった。それでもポーランドはドイツ軍包囲下のワルシャワとヴィッスラ以東の領土で、持久戦を続けることを望んだ。しかし9月17日にソ連がポーランド東部の旧ソ連領に侵入したことが、ポーランドのその希望をも打砕いた。ポーランド政府はルーマニアに亡命したが、軍への最後の命令は「徹底交戦 」だった。

9月27日、数日の空襲の後にワルシャワ守備隊が降伏して組織的抵抗は終息し、ポー

ランド戦は四週間で終結した。

◆II－2　大勝利　フランス 1940年

ドイツ・フランス国境の西部戦線では、開戦以後の数ヵ月が過ぎても戦闘は起こってはいなかった。対峙する両軍が互いの陣地から宣伝放送を流しあうだけの毎日が、「奇妙な戦争」あるいは「座り込み戦争」と揶揄されて半年以上つづいたが、その間に行なわれた戦争終結のための交渉が失敗したため、各国はいずれ来る戦いへの備えを進めるしかなかった。

連合国側、特にフランスは第１次大戦でドイツ軍塹壕線への攻撃で大損害を受けた経験から、防御側が攻撃側よりも有利だと考えていた。特にフランスはドイツ国境に建設時の陸軍大臣の名をとってマジノ線と呼ばれる要塞を国防費の大半を使用して建設していた。

これらの事情からも連合軍は戦略として防御を選んだが、連合国はドイツ軍がマジノ線を迂回するため、第１時大戦で展開された、中立国ベルギーを通過してフランス軍を背後から包囲する「シュリーフェン計画」を再演すると考えていた。この前提にもとずいて連合国軍は「Ｄ計画」を立案したが、これは機械化部隊を含む優秀な部隊をベルギーに前進させ、ベルギー国内の川や運河を利用してドイツ軍を迎え撃つというものだった。

ドイツでもヒトラーがポーランド戦の終った９月27日に西部戦線での攻勢準備を命じていた。参謀本部は10月19日に「黄の場合」と題された作戦計画を提出したが、西部の３個軍集団中、最北部のＢ軍集団に重点を置いてベルギーに侵入するその案は、「シュリーフェン計画」の単なる焼きなおしでしかなかった。ヒトラーは参謀本部の案に満足はしなかったが代案もなく、計画はそのまま承認された。

予定に従えば「黄の場合」は11月12日に開始されるはずだった。だが悪天候を始めとする不測の事態の連続が作戦を幾度も——最終的に実行されるまでに計29回——延期させた。

作戦が次々と延期される間に、「シュリーフェン計画」は連合軍にも周知のものであり作戦が実行されても成果は望めないとの意見が、ドイツ軍作戦部隊のひとつA軍集団の参謀長マンシュタイン将軍から表明された。またマンシュタインは代案として、攻撃の主力をB軍集団からＡ軍集団に移し、ベルギー・フランス国境のアルデンヌ森林地帯を突破して英仏海峡に進出し、連合国軍の後方を遮断する作戦を提案した。

陸軍首脳はアルデンヌ森林は戦車が行動不能だとしてマンシュタイン案を無視し、マンシュタインを作戦に関与しない歩兵軍団長に左遷したが、マンシュタインは転任の際にヒトラーに自分の計画を説明することができた。参謀本部案に不満で、マンシュタイン案に似た着想をもっていたヒトラーはこの計画にとびついた。戦車の権威であるグデーリアン将軍の「装甲部隊はアルデンヌ森林で充分行動可能」との言葉もあって、ヒトラーは「黄の場合」をマンシュタイン案にもとずくものに修正するように命じた。

「黄の場合」はこのようにして「シュリーフェン計画」から「マンシュタイン計画」に変

更した上で実行されることになった。４月末には作戦の準備は整い、あとは空軍の活動に必要な晴天を待つだけだった。

５月10日の早朝におこなわれた重要拠点への爆撃が、「黄の場合」の第一撃だった。爆撃を受けて茫然とする部隊の目前にパラシュートが次々と着地し、降下猟兵部隊が戦車や重砲の前進に必要な橋梁を次々に確保した。これらの橋梁を通って、Ｂ軍集団がオランダとベルギーに進撃した。

ドイツの攻撃に連合国軍は、各軍に「Ｄ計画」の発動を命令した。予定通り各部隊はベルギーへと前進したが、英大陸派遣軍、仏第７軍といった精鋭は計画にしたがって全軍の北翼に配置され、それらの部隊からマジノ線までの間にひろがるアルデンヌには、二線級の部隊が守備についただけだった。

連合国軍の注目がＢ軍集団に集中する頃、装甲７個師団を先頭にＡ軍集団も攻撃を開始した。当初アルデンヌを守備していたベルギー軍は抵抗らしい抵抗を示すこともできず、軍の先頭を進む装甲師団は５月12日には、唯一、天然の防衛線となりうるミューズ川に到達していた。

５月13日、第19装甲軍団がセダンでミューズの渡河作戦を開始した。ドイツ軍最精鋭の３個装甲師団（第１、２、10）を主力とするグデーリアン将軍指揮下の軍団に対するのは、仏第２軍の予備役師団でしかない。

装甲軍団は後方の交通渋滞のため重砲を欠いていたが、急降下爆撃機と88ミリ対空砲によってフランス兵を制圧した上で、歩兵をミューズの西岸へと渡らせることに成功した。

ドイツ軍がその橋頭堡に戦車を含む重装備を運びこむ前ならば、空襲や予備隊による反撃で橋頭堡を排除することはまだ可能かもしれなかった。だが通信の混乱と不備で空軍は麻痺状態だったし、予備隊はなかなか到着しなかった。

午後遅くセダンの仏第55歩兵師団司令部に、ドイツ戦車が現れたとの悲鳴にも似た報告がもたらされた。実際にはドイツ戦車はミューズ河を越えてはおらず、味方戦車を誤認しただけのことだったが、この知らせをきっかけとしてセダンにパニックが発生し、夜までにはセダン戦区のフランス軍は総崩れとなっていた。同じころにフランス軍予備部隊がようやくセダンに近付きつつあったが、予備隊の大半もセダンからの潰走に巻きこまれてしまい、前線に到着したのはごく一部の部隊にすぎなかった。

５月14日の夜までにフランス軍の小反撃を撃退したドイツ軍はセダンの橋頭堡を出撃点として確保し、第19装甲軍団の師団群は西への突進を開始していた。各装甲師団がミューズ河西岸へと前進したこの日、Ａ軍集団に「黄の場合」の第２段階、英仏海峡への前進が命令された。

５月15日、Ａ軍集団所属の各装甲師団は西へ進んだ。１日のうちに各師団は数十キロの距離を踏破し、それが連合国軍戦線に60kmに及ぶ巨大な裂け目を生じさせていた。

連合国首脳はようやくこの頃になってミューズ河からの攻撃が主攻勢であることに気づき、ドイツ装甲師団を阻止するためフランス軍機甲師団が送りこまれた。しかし戦闘結果は惨

めなものだった。個々のフランス戦車はドイツ戦車より優秀だったが兵の練度は遥かに劣っていた。くわえて全軍の混乱から各部隊がばらばらに投入されたため、フランス戦車隊は有効な攻撃も行なえず、多大の損害を受けて敗走するだけだった。

だがドイツ軍にも意外な伏兵が存在した。皮肉にもそれはドイツ軍上級司令官たちだった。保守的な司令官たちにしてみれば、装甲部隊が歩兵の遥か前方に突進し両者の間に数10kmの間が形成されるのは、反撃の危険を増加させるだけでしかなかった。５月17日、陸軍総司令部から第19装甲軍団に停止命令が与えられた。軍団長グデーリアンは自らの辞任まで持ち出してこの命令に強硬に反対し、前進を継続させた。

５月20日には第19装甲軍団はソンム河口近くのアベヴィーユを占領し、北部の連合国軍を包囲することに成功した。連合国軍で一杯の袋を締めあげるため、各装甲師団は海峡諸港を目標に北へ転進した。

連合国軍はソンム河沿いに新たな防衛線を形成することを急ぐとともに、南北からの反撃によってドイツ軍を分断することを計画した。南からの反撃は司令官の交代などから中止されたが、北では英機甲師団を中心とする反撃が、５月21日にアラスで開始された。英重戦車はドイツ軍第一線を突破したがそれが限界だった。その日のうちに英軍は大損害を受けて後退した。

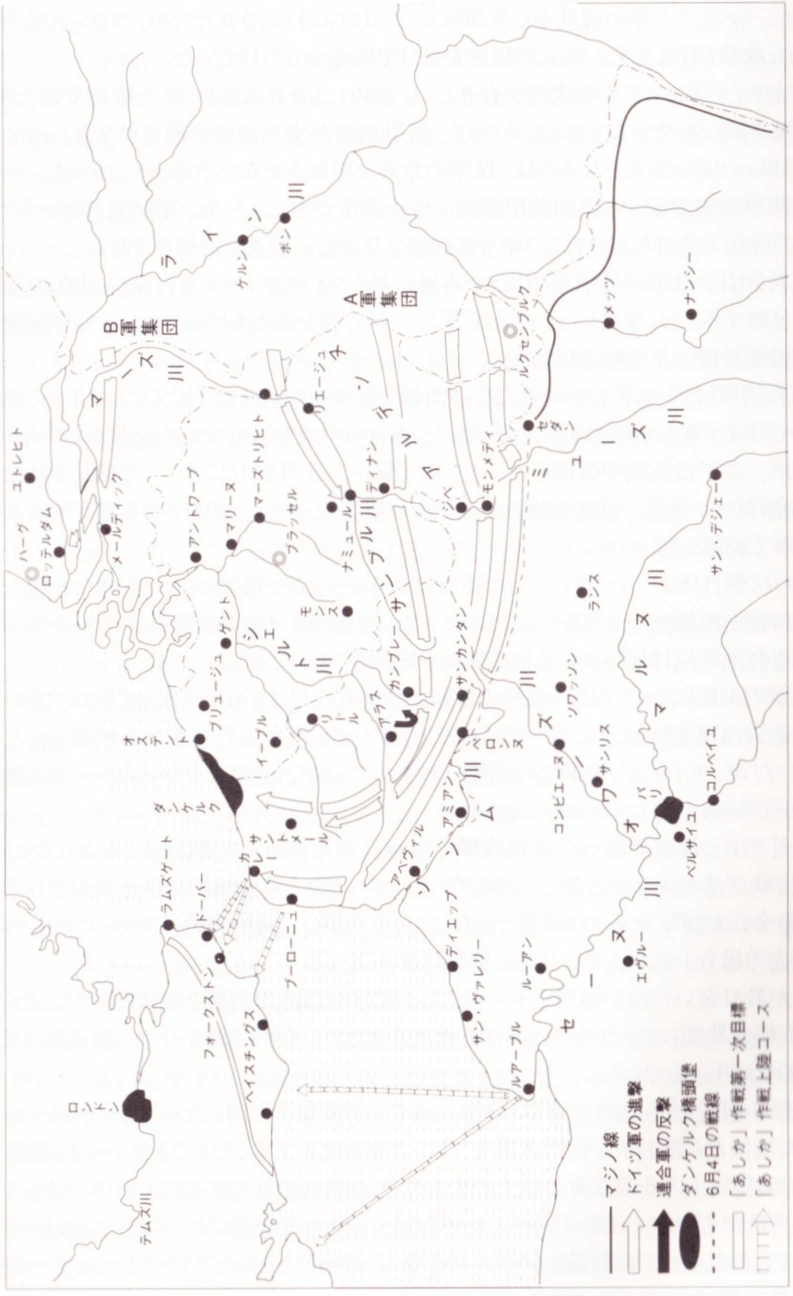
この反撃自体がドイツ軍に与えた損害は小さかったが、反撃への対応のため幾つかの装甲師団を前線から後退させることになった。この結果ドイツ軍の前進はいくらか弾みを失い、連合国部隊は捕捉から逃れて後退を続けることができた。

反撃の失敗によって南との直接の連絡が失われた以上、海路を使って脱出するのが北部の連合国軍を救うために唯一残された方法だった。連合国各部隊は海峡諸港へと後退を急いだが、ドイツ装甲部隊との距離はわずかでしかなく、生死をかけたレースに勝利するのがどちらかは誰にもわからなかった。

５月25日、海峡諸港への直接攻撃で戦車に多大の損害を生じることを恐れたヒトラーは、海峡諸港の大半を占領し、残るダンケルクへと急ぐ装甲師団に停止命令を与えた。この命令によりダンケルクは爆撃と歩兵によって攻撃し、装甲師団はフランス本土への攻勢「赤の場合」に備えて、休息と整備にはいった。

だが数日続いた雨が爆撃を不可能にし、泥濘が部隊の前進を困難なものとした。そしてこの停滞期間にダンケルクの部隊を救出するため、イギリスはヨットから駆逐艦まであらゆる船を送り込んでいた。

天候の回復とともにドイツ空軍はダンケルクへの空襲を再開したが、港や車両などで急造した桟橋から撤退するイギリス軍やフランス軍を阻止することはできなかった。撤退の過程で200隻以上の小型船舶が失われたものの、６月４日までに主にイギリス兵からなる30万の兵員がイギリスへとたどり着くことができた。これは連合国にとって救いではあったが、打捨てられたすべての装備とイギリス兵を救うため犠牲となったフランスとベルギーの捕虜の列が、ダンケルクまでの災厄の証となっていた。



精鋭部隊と多量の装備を失ったフランスに防衛力は残されておらず、フランス軍総司令ウェイガン将軍言うところの「フランスの戦い」はこの時点で実質的に終っていた。

6月5日「赤の場合」が開始された。ソンムの戦闘でフランス軍の抵抗が潰えた6月10日、イタリアがフランスへの攻撃を開始した。14日にはドイツ軍が無防備都市パリに入城し、6月24日フランスはドイツに降伏、フランス戦は終了した。

◆II－3　幻の「あしか作戦」　バトル・オブ・ブリテン 1940年

フランス戦勝利の直後ヒトラーはイギリスに和平を呼びかけたが、イギリスがこれを無視したため、ヒトラーはイギリスを屈服させるため新たな行動を起こさねばならなかった。海空軍によるイギリス封鎖を始めとする各種計画がその方法としてヒトラーのもとに提出されたが、その中には「ライオン（レーヴェ）」と名付けられた英本土上陸作戦案も含まれていた。ヒトラーはこの「ライオン」に注目し、作戦名を「あしか（ゼーレーヴェ）」と改称したうえで、7月16日に作戦の準備を各軍に命令した。

「あしか」について海軍は使用可能な船舶量から小規模な作戦を望んだが、陸軍の計画は9万の兵員を第一波として26万の兵員と3万の車両を始めとする装備を上陸させ、必要ならさらに50万の予備兵力をも投入する大規模なものだった。ドイツ国内で使用されているすべての船を使っても陸軍案の実行は困難だとの海軍の異論はあったものの、結局「あしか」は陸軍案に近い形で実行されることになり、8月15日が作戦開始の予定日とされた。

英仏海峡の制海権の確保が上陸を成功させるには必要だったが、ドイツ海軍はもともと英海軍に比して劣勢なうえ、春のノルウェー戦での損害などのため「あしか」のために使用できる艦艇は巡洋艦と駆逐艦10隻ほどでしかなかった。このため英艦隊を封じ込めるのはドイツ空軍の任務とされ、英仏海峡地区の制空権を獲得するための航空作戦が上陸前に実行されることになった。

この空襲の成否が「あしか」に大きな影響を与えることから、「あしか」の開始日は空襲の進展を待つために9月中旬に延期された。

英本土空襲は8月初旬に開始されたが、主力戦闘機メッサーシュミット109がロンドンまでしか飛行できなかったことに示されるように、地上軍の直接支援を主任務に編成されたドイツ空軍には航空撃滅戦のための組織も器材もなく、英空軍を一時的に危地に追いこんだものの決定的な損害を与えることはできなかった。

後に「バトル・オブ・ブリテン」と名付けられたこの航空戦は継続していたものの、ドイツ空軍が制空権を確保できないことは明白であり、また秋風のため英仏海峡で荒模様が続くこともあって、10月12日「あしか」の翌年春までの延期が決定された。

このあいだにヒトラーの視線はイギリスではなく、バルト三国併合に始るソ連の東ヨーロッパ進出に向けられていた。ソ連の行動自体は独ソ不可侵条約でヒトラーも認めたものだったが、ソ連がルーマニアに領土要求を行なったことがヒトラーを刺激した。

ドイツは石油をルーマニアとソ連に依存しており、ルーマニアがソ連の影響下に置かれたなら、ドイツの石油供給源はソ連にすべて握られることになる。

ソ連の石油独占がドイツの戦争遂行をも左右するようになるのを恐れたヒトラーはソ連との戦争を決心し、12月18日、対ソ作戦「バルバロッサの場合」を発令した。

この命令にしたがって陸軍はポーランドへと移動した。空軍は対ソ戦の偽装として英本土空襲を続けたが、翌春にはほとんどの爆撃機がドイツ東部へと移動し、「あしか」が泳ぐことは二度となかった。

歴史では「あしか」作戦は幻に終ったが、もし実行されたなら作戦はどのような結末を迎えることになっただろうか?

大陸の軍隊であるドイツ軍には、上陸用舟艇を始めとする上陸作戦用の資材はまったく存在しなかった。このため港が確保できるまでの上陸には、小型の漁船や川船など、砂浜に着底可能な船を上陸用舟艇代りに使用せねばならなかった。これら臨時舟艇は低速で、英仏海峡を渡るには一昼夜の時間が必要だった。大軍を運ぶ船団の集結が英軍に察知される可能性は高く、上陸を知った英軍は船団に空海から攻撃をくわえるだろうが、漁船や川舟には装甲などはなかった。

第一波が上陸に成功しても、攻撃が無事成功するかは疑問だった。臨時舟艇では重砲を運ぶことはできないため、部隊は手持ちの軽火器だけで戦わねばならなかった。第一波には、8mまで潜水可能に改造されたIII号、IV号戦車も投入されるが、これが第一波部隊唯一の支援兵器だった。上陸予定の9月中旬には、沿岸を守備する英軍の装備がダンケルクでの損失からかなり回復していたことから見ても、軽装の上陸部隊はかなりの苦戦を強いられたのではなかろうか。

そして何よりの脅威が英海軍だった。第一波が奇襲に成功したとしても、以後の輸送は英海軍の攻撃にさらされることになるだろう。前述したようにドイツ海軍には英海軍を阻止する戦力はなかったし、ドイツ空軍の洋上作戦能力の低さを考えるなら——ドイツ軍機は誤爆で味方駆逐艦を沈めたことさえある——、空軍が決定的な戦果を上げることも期待できなかった。戦艦5隻、巡洋艦11隻を主力とする英本国艦隊の出撃以後、ドイツ船団が英仏海峡を渡ることはまず不可能となったに違いない。

このようにしてみるなら「あしか」作戦が成功する確率はほとんどなかったといっても過言ではないだろう。ドイツ軍がイギリス南部に上陸し橋頭堡を築くことは可能かもしれない。だが英海軍の介入が以後の軍主力の海輸を困難にすることを考えるなら、上陸部隊はイギリス本土に孤立するしかなく、補給の切れた上陸部隊の降伏か全滅が「あしか」の結末となったことは確実で、「あしか」はドイツ軍最初の敗北として記録されることになっただろう。

「あしか」の敗北によって戦局がドイツに急速に不利になる可能性は少なかっただろう。しかし、その結果によって敵味方双方の士気や政治情勢は微妙に変化し、戦争の経過が多少は違ったコースへ導かれることは確かだったろう。だがその変化がどんなものかはもはや知る術はない。

III ロンメルの戦争　北アフリカ 1941～43年

イタリアの参戦理由の一つに大統領ムッソリーニの夢、『新ローマ帝国』の実現があった。イタリア軍はこの目的のため植民地リビアからエジプトを攻撃した。エジプト駐留の英軍からの抵抗はなかったが、補給切れを恐れたイタリア軍は国境から70キロのシディ・バラニに達したところで停止し、武装キャンプを設けて補給の確保をはかった。

イタリア軍の停止を知ったイギリス軍は、機甲部隊を中心とする3万の戦力で反撃に出た。イタリア軍は20万の兵員を有していたが対戦車砲を始めとする重装備は少なく、エジプト領内から簡単に一掃された。英軍はさらに攻勢を続け1月にリビア領内へ侵入、1ヵ月間の戦闘で13万の捕虜と1,300門の砲を失って、イタリア軍はリビア東部キレナイカで全滅した。

この敗北によってムッソリーニが失脚し、イタリアが戦争から脱落することを恐れたヒトラーは、イタリア軍を支援するための部隊をリビアへ送りこむことにした。ドイツアフリカ軍団と命名されたこの部隊の指揮官として、マンシュタインとフランス戦で装甲師団長として名をあげたロンメルの二人が推薦されたが、ヒトラーは部下の士気を高める才能をもったロンメルを選んだ。

ロンメルがリビアに到着したのは1941年2月12日のことだった。ロンメルに与えられた命令はイタリア軍に協力してリビア西部トリポリタニアを防衛することだったが、エジプトからの長距離の進撃でイギリス軍の戦力が低下していることを知ったロンメルは命令を無視して攻勢にでることを決意した。

3月後半になってある程度の戦力が到着すると、ロンメルはエル・アゲイラから攻撃を開始した。砂漠戦のベテランが新編成の部隊と交代したばかりだった英軍はこの予想外の攻勢に混乱し、大損害を受けてエジプト国境へ後退した。

英軍を追うアフリカ軍団も砂漠での戦車の故障や補給不足に悩んでいたが、ロンメルに手綱をゆるめるつもりはなく、英軍拠点トブルク要塞へアフリカ軍団を前進させた。トブルク港が利用できれば前線までの補給距離を短縮できるため、4月から5月にかけてトブルク攻撃が繰返されたが、要塞を陥落させることはできなかった。

アフリカ軍団がトブルクで苦戦している間に、英軍はエジプトに増援部隊を送りこんでいた。この新着の戦力、特に重装甲のマチルダを含む、250台の戦車に力をえた英軍は6月15日にトブルクを救出するためこの攻撃にでた。

英軍は早く国境に向う進撃を海岸沿いに開始したが、砂に足をとられた砲兵が脱落したため、戦車は国境に設営されたドイツ軍防御拠点に単独攻撃をかけることになった。これらの拠点には火力増強のため88㎜高射砲が配置されており、重装甲のマチルダをも次々に撃破するその威力の前に英軍の前進は停止した。なおも英軍は前進を試みたが、ドイ

ツ軍拠点を抜くことはできなかった。そして英軍攻勢の３日目、アフリカ軍団の戦車隊が英軍の後方へ進出したことに包囲の危険を見た英軍はエジプトへと退却を始め、戦闘は終った。

夏の間、英独両軍は装備や物資の整備に努めていた。特にイギリス側では首相チャーチルの命令のもと、トブルク解放と砂漠のドイツ・イタリア軍の殲滅を目的とする「クルセイダー」作戦を計画していた。チャーチルは英領インドとの重要な交通路であるスエズ運河を擁するエジプト侵略の危険を感じていたのである。この攻勢のため英軍は、本土防衛用に必要な兵力を除く多数の戦闘部隊を、世界中の英領からエジプトへと送りこんだ。ドイツ軍もまたトブルク攻撃を計画していたが、ロンメルは自分の計画に熱中するあまり英軍の攻勢を示唆する情報すべてに目を塞いでいた。

11月18日、「クルセイダー」作戦が開始された。ロンメルが英軍が攻勢にでたことを信じようとしなかっためドイツ軍の反応は鈍く、進撃速度がドイツ軍の反撃を恐れて緩慢なものだったにもかかわらず英軍はその日のうちに無抵抗のままトブルク東南のガブル・サレーにまでに進出した。

英軍がガブル・サレーに進出したのは、前進を続けることでアフリカ軍団を誘い出し、戦車だけで２倍以上の兵力を利用してこれを殲滅するためだった。アフリカ軍団の反撃がなかったことから英軍は計画の変更を余儀なくされた。その修正によって英軍機甲旅団はトブルク南方のシディ・レゼグを攻撃してドイツ軍を誘引することになった。

英軍攻勢の主力である３個機甲旅団は命令通りに進撃を続けたが、前進中、最初は緊密だった各旅団の間隔が大きくひろがり、その幅は80km以上に達し、これが英軍機甲部隊に破滅をもたらすことになった。

19日午後にはドイツ側も攻撃が全面的なものであることを認識しており、アフリカ軍団は反撃を開始した。以後５日間の戦いで分散した英機甲旅団は各個撃破され、ドイツ側にもかなりの損害は生じたものの、英軍の戦車戦力はドイツ軍以下の数にまで激減してしまった。

だがここでロンメルは戦況の判断を過った。ロンメルはこの数日の戦いで英軍はその戦闘力をほぼ喪失したものと判断し、英軍を補給から遮断するためアフリカ軍団にエジプトへの前進を命令した。この行動のおかげで戦闘を停止して部隊を再編成する機会を得た英軍は、予備として控置されていた戦車300両を投入して攻撃を再開した。アフリカ軍団はエジプトから転進して英軍を迎撃したが、無意味な進撃によって補給が欠乏したアフリカ軍団の戦闘力は低下しており、12月６日にトブルクの囲みを解いて西への退却を開始した。

退却戦は12月一杯続き、アフリカ軍団は全キレナイカを放棄して春の攻撃開始地点エル・アゲイラまで後退した。英軍はこれを追撃したもののドイツ軍の巧妙な後衛戦と補給の欠乏のため、ベンガジで停止した。

退却の結果、補給港トリポリに近づいたアフリカ軍団はこれまでの戦闘の損失をある程度補充することができた。ロンメルは英軍戦力が追撃戦によって弱体化しているとみると1942年１月６日、攻撃に転じた。ロンメルの予想通り英軍の抵抗は弱体でアフリカ軍団は数日でベンガジを奪回、トブルク西部ガザラ地区に進出した。前進をさらに継続するだけの戦力がアフリカ軍団にはなかったため前進はここで止り、ドイツ軍は次回作戦に備えて再編成に入った。

英軍はガザラ地区の海岸から内陸にかけて地雷源と防御拠点を組合せた「ボックス」を多数構築し、ドイツ軍を待ち受けていた。英軍は「ボックス」でアフリカ軍団の戦力を消耗させ、「ボックス」後方に待機した機甲部隊の攻撃によって戦闘を勝利に導く予定だった。一方、ロンメルもガザラの防御が堅固なものであることは充分に承知していた。このためロンメルは指揮下のアフリカ装甲軍のうち、機動力に乏しいイタリア歩兵のガザラ陣地に対する正面攻撃で英軍を牽制し、アフリカ軍団には「ボックス」地帯を南方から迂回させて後方から英軍を撃破し、その後トブルクを攻略するための作戦を用意していた。

５月26日午後、ガザラ陣地への正面攻撃が開始され、アフリカ軍団も夜の訪れとともに南へ移動した。砲炎を背景に５個師団の車両が磁石を頼りに砂漠を進む。

翌朝には、アフリカ軍団はガザラの後方で英軍機甲部隊を襲撃していた。「クルセイダー」の時と同様、機甲部隊は分散配置されていたが、６ポンド砲や、75㎜砲搭載のグラント戦車によってアフリカ軍団は大損害をこうむった。しかもアフリカ軍団の補給路をドイツ側には未知の「ボックス」が塞いでいたため、アフリカ軍団は補給を受けられないまま敵中に孤立することになった。

だが英軍はドイツ軍の危機的状況に気づかず、ロンメルが孤立した部隊の防御を固め、それと同時に補給路を塞ぐ「ボックス」に攻撃を始めるのをそのまま見送ってしまった。「ボックス」は数日間の抵抗の後陥落し、遅ればせながらアフリカ軍団に迫った機甲部隊も88㎜砲の火力で撃退された。

補給を得たアフリカ軍団はガザラ陣地への攻撃を再開した。予備戦力をこの数日で消耗していた英軍はもはや攻撃を支えきれず、ガザラ陣地ばかりかトブルク要塞までも失って、エジプトへと退却した。

本来ドイツ軍の作戦がキレナイカの回復を目的とするものだったことからすれば、成果はすでに充分なものだった。だがトブルクの奪回によって大量の戦利品を入手したロンメルは、この物資を利用してエジプトへ進撃しスエズ運河を制圧することを考えた。この攻撃のためアフリカ軍団はさらに800kmを前進しなければならなかったが、英軍が混乱状態の今ならばそれも可能だとするロンメルの意見をドイツ・イタリア指導部も承認し、６月29日アフリカ軍団はスエズを目指して出撃した。

装甲車、自走高射砲などで編成されたアフリカ軍団の尖兵は、軽微な抵抗を受けながらも海岸道路を爆進し、深夜にアレキサンドリアに100kmの地点にまで進出していた。翌朝ドイツ軍の前進は砲爆撃に阻止された。彼らを包む砲煙の彼方には小さな街があり、その名をエル・アラメインといった。

アフリカ軍団主力もエル・アラメイン前面に到着したものの、５月以来の戦闘のため、その戦力は通常の１割程度にまで落込んでおり、英軍がアラメイン戦線に構築した陣地を突破することはできなかった。しかもアラメイン地区では海岸の60km南に車両通行不能のカッターラ低地が迫っており、ロンメル得意の迂回作戦も展開不可能だった。アフリカ軍団のスエズ進撃は終った。

ドイツ・イタリア軍が補給源ベンガジ港から1,300kmも離れてほとんど補給を受けられなかったのに対して、英軍は戦線すぐ後のアレクサンドリアからの物資を利用して、ドイツ・イタリア軍を何度も攻撃した。これらの攻撃は小規模なもので戦法も稚拙（例えば戦車と歩兵がばらばらに攻撃をかけてきた）なためドイツ装甲師団によって簡単に排除できたが、装甲師団の出撃はただでさえ不足気味の燃料を大量に消費、以後の作戦行動を制限することになった。８月末、アラメインを突破する再度の試みが失敗に終った後、ロンメルは部隊を防御体制へ移行させた。

ロンメルからスエズを守り通せたのは明白だったが、チャーチルはそれだけでは満足せず、ロンメルをエジプトから追い払うための攻勢の早期開始を望んでいた。だがアラメインに展開する英第８軍の司令官モントゴメリーは自分が必要とする資材が揃うまでは攻撃を開始しようとせず、英独両軍はアラメイン戦線で２ヵ月近く睨みあいを続けた。

ドイツ軍もアラメイン戦線の強化をはかっていた。カッターラ低地が側面からの包囲を不可能にしていたため、戦線への正面攻撃に備えることが重視された。歩兵の防御拠点は88mm砲を含む大量の火器に支援され、その周囲には45万個の地雷を敷設した地雷原「悪魔の園」が構築された。陣地後方には機動予備として戦車連隊が控えていたが、燃料不足は限定された行動しか許さず、結局戦線のどの部分の攻撃にも対応するため、戦闘力を落とすことにはなるが南北に分散配置された。

10月23日の夜、アラメインのドイツ軍陣地は轟音に包まれた。砲弾が休みなく降り続き、「悪魔の園」に埋められた地雷は次々に誘爆した。15分間続いた砲撃はモントゴメリーの攻撃の序幕であり、歩兵がそれに続いた。

猛砲撃によっても地雷原と陣地は完全には無力化されず、英軍攻勢の第１波は大損害を受けて撃退されたが、モントゴメリーはひるむことなく予備部隊を出撃させて攻勢を継続した。アラメイン戦線では１週間に渡って死闘が続き、英軍に戦車200両を含む損害を与えて、戦線は持ちこたえたものの、ドイツ軍の戦車は50両に減り戦闘可能な歩兵も2,000人しか残らなかった。これ以上の抵抗は無理とみたロンメルは11月２日、退却を命令した。

だがアラメインの戦況悪化を知らなかったヒトラーがロンメルへの激励も含めて死守命令を与えたことから、後退開始は２日遅れた。この遅れが損害を増やし、11月４日に退却が始ったとき、ドイツ・イタリア軍は一部の部隊を除いて戦闘力を失っていた。

退却は潰走に等しかった。輸送用の車両のないイタリア歩兵は全滅し、英軍が制空権を掌握していたため退却の隊列は絶え間ない爆撃にさらされた。英軍の追撃が補給の整備を待って遅れたため、燃料も底を尽いたドイツ軍はなんとかエジプトから脱出することに

成功したが、戦闘可能な戦車は12両しか残らなかった。

危機は撤退中にさらに増大した。米英連合軍がアルジェリアとモロッコに上陸し、チュニジアへと動き始めていた。東西両方の敵の進出速度が早ければ、アフリカ軍団は挟撃されて全滅に追込まれることになる。

アフリカの損失はイタリアを戦争から脱落させるばかりか、連合軍のヨーロッパ進攻を早めることになるとみたヒトラーは上陸に素速く反応し、装甲師団やタイガー大隊を使用してチュニジアを確保することにした。その第１陣として、降下猟兵が空輸された。

チュニジアに到着した降下猟兵はその精鋭ぶりを発揮して、チュニスに迫る連合軍を阻止することに成功した。その後もドイツ軍のチュニジア橋頭堡に対する増強は確実に続き、ロンメルとアフリカ軍団がチュニジアまで撤退したこともあって、1943年の始めにはドイツ軍はチュニジアで小規模な攻撃なら実行可能な兵力を保持していた。

ドイツ軍は２月中旬に連合軍の攻勢を遅らせるための限定反撃を開始した。目標となったカッセリーヌ地区を守っていたのは米軍だったが、戦いに不慣れな米軍に大損害が生じた。この成功に攻撃をチュニジアの連合軍を殲滅するものへ拡大することさえも議論されたが、すばやく立直った連合軍の圧力の前に、攻勢は２月末に中止された。

連合軍は３月後半に攻勢を再開したが、連合軍による空海の支配に補給を遮断されて弱体化したドイツ軍は効果的な防御を行なうことはできなかった。ロンメルはヨーロッパでの戦いに備え兵員だけでも撤退させることを提案したが、チュニジアを犠牲にヨーロッパ進攻を遅らせようとするヒトラーはロンメルを解任して、チュニジアを最後の一兵まで死守することを命令した。５月13日ロンメルのアフリカ上陸後２年３ヵ月後にアフリカ軍団が連合軍に降伏しアフリカの戦いは終った。

Ⅳ 大祖国戦争　東部戦線 1941～44年

英本土攻撃の試みが失敗に終り、戦争を早期に終結させる可能性が薄れたことは、経済を戦時体制に改めることなく戦争に突入した産業を危機に追込んでいた。特に戦争による物資不足は軍需生産にも影響を与え、一時的ながら爆弾不足さえ生じていた。

状況を打破する解決策としてヒトラーが選んだのはソ連との戦争だった。ソ連攻撃の成功はソ連の石油を始めとする資源をドイツにもたらし、その資源の利用が対英戦を勝利に終らせる。ヒトラーはこのように考えていた。

命令を受けた参謀本部は作戦計画の作成に入ったが、フランスとポーランドを仮想敵としてきたドイツ軍でソ連戦の研究が行なわれたことはなく、資源地帯の確保を主目標とするヒトラーと敵主力の殲滅を目的とする陸軍との考えの差もあって、作業は難航した。結局、軍事目標としてのモスクワと経済上からのウクライナの確保を共に重視した作戦が両者の妥協の産物として成立した。「バルバロッサ」と命名された作戦のため300万の兵力がポーランドに集結し、北方、中央、南方の三つの軍集団に編成された。

1941年６月22日早朝、ドイツ軍はソ連領内へ侵入した。当初ソ連軍の抵抗は少なく、装甲部隊は数日で100kmを走破して国境に展開するソ連軍を包囲した。だが実情は楽観視できるものではなかった。包囲されたソ連軍は孤立しても戦闘を続けドイツ軍の後方を脅かしていたし、包囲を逃れたものも多かった。このためドイツ軍が目標とした国境地区での敵殲滅は達成できず、歩兵を後方の掃蕩に残しながら装甲部隊はさらにソ連領の奥深く進まねばならなかった。

７月中旬には中央軍集団の装甲部隊は国境から600kmを踏破してスモレンスクを攻撃していた。だがここで展開された包囲作戦でもソ連軍を完全に捕捉することはできず、逆に突出した装甲部隊はソ連軍の反撃にさらされることになった。加えて補給部隊が進撃に追随できなかったため前線の補給状況が悪化し、装甲部隊は補給と再編成のため１ヵ月近い停止を余儀なくされた。

この停止期間の間、ドイツ軍司令部では以後の作戦目標をめぐっての議論がなされていた。将軍たちは政治、軍事の中心であるモスクワの早期攻略を望んだが、ウクライナ攻略を担当する南方軍集団の前進が遅れ気味なのを案じるヒトラーはウクライナの確保に執着し、スモレンスクで休息中の装甲部隊は南へと転進することになった。

南進する装甲部隊は９月中旬に南方軍集団と合流し、キエフ戦区のソ連軍を包囲することに成功した。キエフのソ連軍に死守命令がだされていたため包囲を逃れた部隊は少なく、60万をこす兵が捕虜となった。ヒトラーはキエフでの損害でソ連軍の抵抗力は喪失したと考えて、２ヵ月遅れのモスクワ攻略を命令した。

10月２日、中央軍集団はモスクワへの前進を開始した。数日の戦闘で50万のソ連軍がヴィヤージマとブリアンスクに包囲され戦線は崩壊したが、秋の泥濘がキャタピラ以外の手段での移動を不可能にした。ドイツ軍は泥濘の季節が終るまで攻勢を停止したが、それは冬に戦わねばならないことを意味していた。

11月中旬、零下20℃の気温のもとで攻勢は再開された。当初進撃は順調だったもののソ連軍の抵抗は激しく、それに比例するように気温も低下した。耐寒装備をもたない兵士は次々と凍傷に倒れ、戦車のエンジンは凍りついた。12月初旬にドイツ軍はモスクワまで８kmに迫っていたがそれ以上進むことはできなかった。

ドイツ軍の攻勢が雪の中に潰えると同時にソ連軍の反撃が開始された。ドイツ軍に防御力は残されてはおらず、多量の装備を放棄して西に敗走した。この冬季反撃でドイツ軍は決定的な敗北をこうむりはしなかったものの、６月以来の戦闘で生じた75万の兵力損失は完全には回復できず、ドイツ軍の攻撃力は大きく低下することになった。

1942年春には東部戦線はかなりの出血を代償にソ連軍の冬季反攻を耐えぬいて安定を取戻し、ヒトラーはもう一度攻勢に乗り出すことを決意していた。冬季戦の損失から攻勢は一方面に限定され、軍が再度のモスクワ攻撃を望んだのに対してヒトラーが命令したのは経済上重要視されたカフカス油田攻略を目的とする南部での作戦だった。

装甲部隊の大部分を配属された南方軍集団は６月末に攻撃を開始した。装甲部隊は

ほとんど抵抗を受けずに数100kmを前進しドン河に到達した。作戦は順調に進行しているように見えたが、早期に退却したソ連軍を捕捉することはできなかった。

この退却はソ連軍が柔軟な作戦をも取りうることを示しすものだったが、ヒトラーとドイツ軍首脳は退却をソ連軍崩壊の証拠だとして作戦をより大胆なものに変更した。

新作戦では南方軍集団はA・B軍集団に分割され、それぞれがカフカスとスターリングラードを同時に攻略することになっていた。500km離れた両者を目標とするにはドイツ軍の戦力は不十分で、補給上の困難も予想されたが、崩壊したソ連軍に抵抗力はないとヒトラーは楽感視していた。

カフカスに向ったA軍集団は抵抗を排除して8月にはアジアに侵入しマイコプ油田を占領したが、皮肉にも油田の上で燃料不足に陥り、前進を継続することはできなかった。

一方B軍集団はスターリングラードで激しい市街戦に巻きこまれていた。スターリングラードはヴォルガ河交通の要衝であることから目標とされていたが、河川交通を遮断するには砲爆撃で充分で市街地を占領する必要はなかった。だがスターリンの名を持つこの都市の支配は二人の独裁者ヒトラーとスターリンにとっては威信の問題であり、軍事上価値のない市街地に多量の部隊が注ぎこまれ、スターリングラードの市街戦は3ヵ月近く続いた。両軍の損害はともに大きく、ドイツ軍は攻撃を継続するために軍の側面を守る部隊をも市街に投入しなければならなかった。それら部隊の陣地は同盟軍ルーマニアに引継がれた。

11月19日、ルーマニア軍の守備するドン河沿いの戦線にソ連軍の攻撃が開始された。ルーマニア軍は短時間で崩壊し、ドイツ軍はスターリングラード市街に包囲された。ヒトラーはスターリングラードの死守を命じるとともに、包囲部隊との連絡を回復することをを命令した。

12月中旬に始ったスターリングラード救出の「冬の嵐」作戦はソ連軍の抵抗を撃破して市街地まで50kmにまで接近した。だがソ連軍予備部隊の防衛線を突破することできず、逆包囲の危険が増大したこともあって救出作戦は中止された。スターリングラードのドイツ軍はわずかな空中補給に頼って戦い続けたが、1月末に10万の損害をだして降伏した。

スターリングラード守備隊が多くのソ連軍を引きつけている間に、他のドイツ軍は攻勢開始線ハリコフ地区へ撤退を続けたが、ソ連軍も攻撃の手を休めることはなくハリコフを奪回し、ドイツ軍をドニエプル河とアゾフ海の間に包囲しようとしていた。しかし冬のあいだの戦闘で弱体化し、長距離の進撃で補給状況が悪化したソ連軍は目標を達成できず、突出した部隊は燃料切れで停止した。そこにドイツ装甲部隊が反撃を開始した。この反撃にソ連軍攻勢主力の機甲部隊は全滅しドイツ軍はハリコフを再占領した。ソ連軍の戦闘力は激減し、ドイツ軍がスターリングラードの敗北を打消す勝利をおさめるのも不可能ではないように見えたが、雪解けの泥濘がすべての行動を停止させ、東部戦線はふたたび休息期に入った。

春の間ドイツ軍は戦力の再編成に全力を注いだ。こうして得た兵力はドイツの人的資源

からは以後補充の望めないもので、その使用はドイツの命運をも決するものだった。1943年の作戦方針として全面的な防御も考えられたが、ドイツ軍が選んだのはハリコフとオリョールの間のクルスク突出部を南北から挟撃し、これを排除して戦線を直線化する攻撃計画だった。

作戦は7月5日に開始された。ドイツ軍は攻撃に2,700両の戦車を投入したが、攻勢を察知したソ連軍は突出部に何層もの陣地を構築し、防御体制を固めていた。このためドイツ軍は数百メートルの前進にも大出血し、北からの攻勢は10kmを進んだところで停止した。

一方、北上するドイツ軍も損害は多かったが装甲部隊を集中して堅陣を破り、30kmを前進してソ連防御線を突破しかかっていた。ソ連軍はこの危機に予備の機甲部隊を投入し、両軍合せて1,000両の戦車が衝突する第2次大戦最大のプロホロフカ戦車戦が発生した。1日の戦闘でソ連軍は戦車の半数近くを失ったが、ドイツ軍の消耗も激しく前進を継続することはできなかった。3日後ドイツ軍は攻撃を中止し、東部戦線最後のドイツ軍大攻勢は終った。

クルスク戦では数からいえばソ連軍の損害はドイツ軍を上回っていた。だがソ連にはその損失を補充する能力があったが、全力をクルスク戦に投入したドイツに予備兵力は残ってはおらず、以後東部戦線の主導権は完全にソ連側に移行した。

クルスク戦終了後はソ連軍の攻勢が続いた。消耗したドイツ軍はソ連軍を阻止することはできず、ハリコフとオリョールを放棄してドニエプル河へ撤退した。ドイツ側はドニエプルを防御線としての持久を望んだが、ソ連軍はドニエプルを渡河して11月6日にキエフを解放した。冬になるとソ連軍の攻勢はさらに加速した。ウクライナ全土でドイツ軍は敗走を続けた。1944年の雪解けまでにソ連領南部からドイツ軍は一掃されていたが、北部ではバルト三国と白ロシアがまだドイツ軍支配下に残されていた。

ドイツ軍をソ連領内から駆逐するソ連軍の夏期攻勢「バグラチオン」作戦は、6月22日に白ロシアで開始された。ドイツ軍首脳がソ連軍の計画を誤認したため、攻撃を受けた中央軍集団の戦線は最初の数日間でずたずたに引き裂かれ、ソ連機甲部隊がドイツ戦線後方に前進した。以後の戦いは1941年に同じ土地を舞台に繰り広げられた戦闘の攻守を逆にしたものだった。1週間で10万の戦死者をだして中央軍集団は壊滅し、ミンスクやボブルイスクにはドイツの大部隊が、孤立し包囲されていた。

7月末にはソ連軍の前進距離が補給の限界に達したためヴィッスラ河畔で攻勢は止ったが、ドイツ軍の戦死、行方不明などの合計は50万を越え、その損失を補充するだけの人的資源はドイツには残されてはいなかった。またソ連軍の勝利に同盟国ルーマニア、ブルガリアもつぎつぎに離反し、秋には戦線は南でもハンガリーまで後退していた。

開戦から5年、ドイツの始めた戦争はふたたびドイツに帰ってこようとしていたが、それを受け止めるのは開戦時の精鋭の影のような軍隊でしかなかった。

V 崩壊　西部戦線 1944年6月〜12月

◆V−1 上陸　ノルマンディー 1944年6月

フランスは1940年以後ドイツ軍の休養と再編成の基地として利用されてきた。特に独ソ戦の戦況悪化につれ、有力な部隊は次々に東部戦線に移動し、フランスに残されたのは休養、訓練中の装甲部隊を除けば、ソ連軍捕虜や胃病患者のみで編成されたものを含む二戦級の部隊でしかなかった。1943年以降、連合軍の侵攻作戦が時間の問題になってくると海岸陣地の強化もはかられたが、完成したのは資材不足からごく一部の地域のみでしかなかった。

加えて西部戦線の最高指揮官ルントシュテットが海岸防備の貧弱さから、上陸した連合軍を内陸まで進出させた上で装甲部隊による攻撃を加えることを考えていたのに対し、実際に侵攻作戦を迎撃するB軍集団司令官ロンメルは、連合軍の制空権下では大部隊の昼間移動は困難だとして装甲部隊をも海岸陣地に投入した水際作戦を望むというように、ドイツ軍内部には防衛計画をめぐっての対立が存在した。この問題の解決はつかず、またどの作戦でも重要な、装甲部隊の指揮権をヒトラーが握り続けたこともあって、ドイツ軍の配置は中途半端なものにしかなり得なかった。

1944年春に英仏海峡沿いの天候が回復すると、上陸は時間の問題となってきた。上陸に適した潮の干満や、空挺部隊の夜間降下に必要な月齢などから上陸日が予測できたが、6月初旬は下弦の月からも上陸に適していた。だが気象班からの英仏海峡の天候悪化の知らせと、6月4日以降はそれがさらに悪化するとの天気予報に、ドイツ軍の警戒はゆるみ、ロンメルも休暇をとって帰国した。

連合軍側でも、天候の悪化にともなって上陸延期について議論が交わされていたが、天候は4日夜半から6日の昼にかけて一時好転するとの天気予報に、連合軍総司令官アイゼンハワーは6月5日早朝、翌日のノルマンディー上陸を決定した。

6日深夜、3個師団の空挺部隊がノルマンディーに降下し、軍事上重要な橋梁や交差点を占領した。上級指揮官たちが上陸の知らせを最初疑ったことと、フランス地下組織の電話線切断などもあってドイツ軍の連絡が混乱、上陸に対する警報の発令は遅れた。

海岸では朝靄が晴れると沖合を進む大船団が目撃された。つぎの瞬間にその船団内の戦艦や巡洋艦が砲撃を開始。海岸陣地に対する砲爆撃は1時間続き、ほとんどの陣地がすぐに廃墟に変った。

6時半に部隊が上陸用舟艇から、ジュノー、ゴールド、ソード、ユタ、オマハと名付けられた海岸に降りたとき、ドイツ軍の抵抗は軽微なものでしかなく、上陸部隊は内陸に向って前進を開始した。唯一、オマハ海岸では爆撃機が雲で目標をはずしたため、無傷のままの陣地の火線に飛込んだ米軍は2,500人以上の死傷者をだしていた。ドイツ軍はオマハの上陸を撃退できたと考えていたが、米軍は午後には海岸陣地を越えて、橋頭堡の深

さを２kmにまで拡大していた。

午後には連合軍の橋頭堡は確立されていたが、この時点になってようやくドイツ軍上級司令部はノルマンディーが連合軍の侵攻にさらされていることを理解した。上陸海岸近くに配置されていた第21装甲師団には、午後２時半になってようやく上陸への迎撃命令が与えられた。師団の一部は英軍の二つの橋頭堡ジュノー、ソード間の間を海岸線まで突進したが、戦車連隊が対戦車砲に阻止されたため戦果を拡大するこはできなかった。一方、内陸にあった装甲師団にも前進命令がだされたが、連合軍機が地上に動くもの全てに攻撃を加えている状況では昼間移動は不可能に近く、ノルマンディーへの到着は翌日以降にしかならなかった。

ドイツ軍は装甲部隊が到着すると連合軍を海に追い落とすためカーン前面で攻勢にでたが、兵力増強を急速に進めた連合軍の逆襲を受けることになった。防御体制に移行したドイツ軍はバイユー南方で連合軍を停止させたが、英軍機甲師団はドイツ軍戦線を西から迂回してカーンを攻略しようとした。

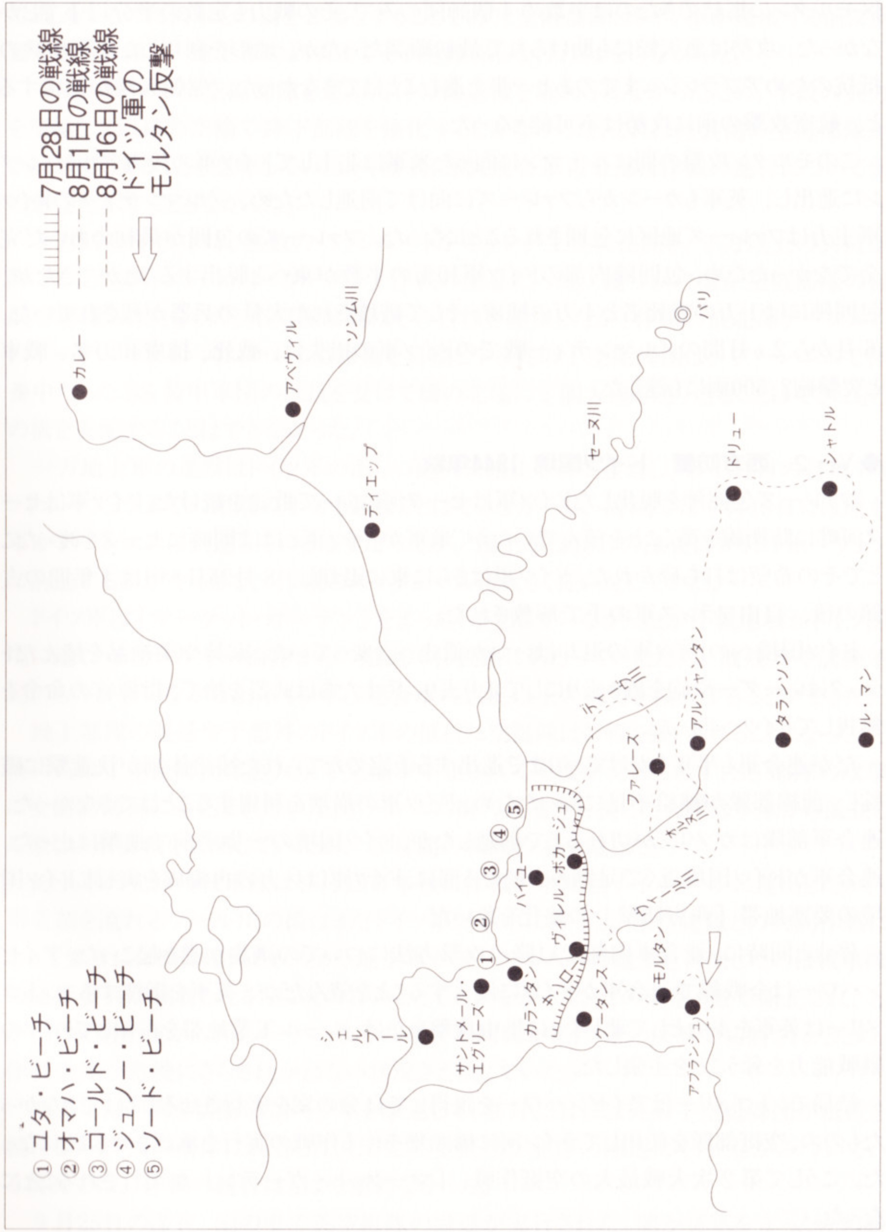
１個旅団規模の英軍機動部隊がドイツ軍後方ヴィレル・ボカージュに進出し、さらにカーンへ向おうとしたとき、前線に到着したばかりの４両のタイガーが襲いかかった。全速力で移動するため道路上に１列に並んだ車両は次々と撃破され、英軍は数分で25両の装甲車両を失った。タイガーの半数も失われたものの戦闘の間にドイツ軍は防御部隊を集結させ、英軍の戦線突破の試みは失敗に終った。

ボカージュと呼ばれる生け垣や森林の多いノルマンディーは決して攻撃に向いた地形とはいえずドイツ軍の頑強な抵抗もあって、上陸２日目に占領するはずのカーンが実際に英軍の手に落ちたのは１ヵ月以上すぎた７月13日であったように、連合軍の攻撃はなかなか進展しなかった。連合軍は英軍の戦力が５年間の戦争によって枯渇しかかっているため、西部での米軍の突破で戦局を決する予定だったがその米軍の前進もまた遅れていた。

この停滞を打破するため英軍は７月18日、カーン地区でドイツ軍を英軍正面に牽制するために攻撃を開始した。絨毯爆撃で7,700トンの爆弾がドイツ軍陣地に降り注ぎ、兵器は破壊され土に埋れた。その後を機甲師団３個が前進したが、爆弾で穴だらけになった地面は戦車をも通行不能にし、生残ったドイツ軍の砲火が英軍戦車を破壊した。１日だけで200両近い戦車が失われたが、ドイツ装甲部隊の主力が英軍前面に集中したことを思えば充分な代償だった。

７月25日に、米軍もサン・ロー地区で攻勢にでた。ここでも絨毯爆撃が行なわれ、多量の爆弾によって、これまで持ちこたえていた戦線は短時間で崩壊した。米軍は爆撃で掘返された土地を通ってノルマンディー半島の付け根アブランシュまで南下した。米軍はさらにアブランシュを突破すると部隊を放射状に前進させ、東のル・マン方面への米軍の進出はドイツ軍を包囲の危険にさらすことになった。

この危機に対して、ドイツ軍は米軍の出発点であるアブランシュを奪回し、前進中の米軍を逆に包囲することで対応しようとした。ドイツ軍はこの攻撃にノルマンディー地区の装



甲師団９個のうち８個までを投入する予定だったが、８月７日の攻勢開始までに作戦地区モルタンに集結できたのは半数の４個師団のみで、その戦力も定数の半分以下でしかなかった。攻勢は悪天候にも助けられて最初順調だったが、地形を利用した米軍歩兵の抵抗のためアブランシュまでのあと一歩を進むことはできなかった。翌朝天候が回復すると、航空攻撃の前に攻勢は不可能となった。

このモルタン攻撃の間にル・マンに向った米軍は北上してドイツ軍の後方アルジャンタンに進出し、英軍もカーンからファレーズに向けて前進したため、ノルマンディーのドイツ軍主力はファレーズ地区に包囲されることになった。ファレーズの包囲が最初のあいだ完全でなかったため、包囲陣内部のドイツ軍10万の半数が東へと脱出することができたが、包囲陣には１万の戦死者と４万の捕虜、そして破壊された大量の兵器が残されていた。６月から２ヵ月間のノルマンディー戦でのドイツ軍の損失は、戦死、捕虜40万名、戦車と突撃砲2,500両にも達した。

◆Ｖ－２　西方防壁　ドイツ国境 1944年秋

ファレーズ包囲陣を脱出したドイツ軍はセーヌ河に向って敗走を続けた。ドイツ軍はセーヌ河畔に防衛線を築くことを望んでいたが、米軍がドイツ軍とほぼ同時にセーヌを渡ったことでその希望は打ち砕かれた。ドイツ軍はさらに東に退却し、８月25日パリは４年間の占領の後、自由フランス軍の手で解放された。

ドイツ国境へのドイツ軍の退却はいつか潰走へと変っていた。家具や美術品を積んだトラックはレーダーや砲を置き去りにして走り去り、兵士たちは武器を捨て、指揮官の命令を無視してドイツへ向った。

だが連合軍も半年をかけてパリまで進出する予定でたてられた補給体制が快進撃に破綻し、前線部隊が補給不足に陥ったため、ドイツ軍の崩壊を利用することはできなかった。連合軍部隊はガソリンが切れるまで前進したが、ドイツ国境の一歩手前で進撃は止った。連合軍がドイツ国境近くで足踏みを続ける間に、ドイツ軍は兵力の再編成を実行しドイツ国境の要塞地帯「西方防壁」の強化を急いだ

停止と同時に、連合軍内部で以降の攻撃方法についての議論が巻き起こった。アイゼンハワーは全戦線で連合軍がドイツに侵入することを望んだが、英軍を指揮するモントゴメリーは英軍を主力として北ドイツに集中攻撃をかけ、ルール工業地帯を占領してドイツの継戦能力を奪うことを主張した。

結局モントゴメリーはアイゼンハワーを説得して自分の案を実行させることはできなかったものの、空挺部隊を使用してライン河に橋頭堡を作る作戦の実行を承認させることになった。こうして第２次大戦最大の空挺作戦、「マーケット・ガーデン」が実行されることになった。

「マーケット・ガーデン」の基本プランは「西方防壁」への直接攻撃を回避するため、オランダ経由でドイツに侵入するというものだった。モントゴメリーはこの方法で要塞攻撃のための時間と兵員の損失をおさえられると考えていた。問題は川の多いオランダを短時間で通過するのに何本もの橋を必要とすることであり、空挺部隊はドイツ軍が爆破する前に重要な橋を占領し、地上軍の到着までそれを確保しなければならなかった。

一回の降下で全空挺部隊を運ぶだけの輸送機を集められなかったため、半数の兵力を空輸して以後の空輸で降下部隊を強化するしかなかった。これは軽装備の空挺部隊がさらに弱化することを意味していたが、勝利に沸く連合軍司令部は作戦の進行について何の懸念を示すこともなかった。

９月17日午後１時、無数のパラシュートがオランダ上空に花開き、２万以上の兵員が降下したのが「マーケット・ガーデン」作戦の開幕だった。幾つかの橋が空挺部隊の目前で爆破されたものの、空挺隊は概ねその目標を確保したが、作戦の最北部アーンエムのネーデル・ライン河にかかる道路橋を目標とする英第１空挺師団は、アーンエムで休養中だったSS 装甲軍団の抵抗を受けて橋の北端に１個大隊を送り込むことはできたものの橋を支配することはできなかった。

一方地上軍の進撃はドイツ軍の激しい砲火に阻止されて遅延し、第１日目の目標アイントホーフェンまでの距離の半分も進むことはできなかった。計画では９月18日には地上軍がアーンエムに到達しているはずだったが、地上軍は18日の深夜にアイントホーフェンに前進するのがやっとで、作戦のスケジュールは大きく狂いだしていた。

ドイツ軍は「マーケット・ガーデン」をまったく予想していなかったが作戦地域がドイツ国境に近く、またベルギー沿岸からの撤退の移動路にあたっていたため、敗残兵や訓練不足のものが多いながらも、ドイツ軍は連合軍の想定以上の戦力を投入することができた。

地上部隊の遅延や予想外のドイツ軍の抵抗に空挺隊は苦戦を強いられることになったが、特に英第１空挺師団は悪天候で空輸が中止されて増援が受けられず、SS 部隊の攻撃に全面的防御に追込まれていた。アーンエム橋の北端を占拠した大隊は本隊から孤立して激しい市街戦を展開していたが、５日間の戦闘の末全滅した。

地上軍の先頭の戦車隊は９月19日午後に作戦の中間点ナイメーヘンに進出したが、市北部を流れるワール川の橋はまだドイツ軍の手中にあった。米空挺隊との共同作戦によって翌日には橋は確保されたが、地上軍がアーンエムへの進撃を再開したのは戦車隊の随伴歩兵が到着したさらに次の日のことでしかなかった。この前進も数で阻止され、しかも作戦開始点からナイメーヘンまでの連合軍回廊がドイツ軍の反撃で切断されたため、作戦全体が危機にさらされかねない状況さえ生じていた。

地上軍は回廊を切断したドイツ軍を撃退して、９月23日には英第１空挺師団が抵抗を続けるライン河の南岸に到着した。しかし英空挺隊が北岸の陣地にやっとしがみついている状況では、作戦の続行はもはや望めなかった。

９月25日の深夜、雨の中で英空挺隊の撤退が実行された。闇が英軍を守ったため撤退での損害は少なかったが、ライン北岸で戦った英空挺隊9,000人中、友軍に収容されたのは2,400人ほどでしかなかった。

連合軍は作戦開始線からナイメーヘンまでの95kmを占領したが、ラインに橋頭堡を確保できなかったことが「マーケット・ガーデン」の失敗の証明となっていた。連合軍が再びアーンエムを占領するのは戦争も終り近い1945年４月のことでしかなかった。

９月中旬には連合軍部隊はドイツ国境に達し、特に米第１軍は国境を越えた最初の大都市アーヘンへの攻撃を開始していた。アーヘンがカール大帝以来の古都だったためヒトラーは死守を命じ、米軍が廃虚と化した街を占領するまでには1ヶ月以上の時間と数千の人命が必要だった。米軍はさらに南方、独仏間で永年の係争地帯となっていたロレーヌにも前進していたが、補給不足とドイツ軍の抵抗のため、８月のような快進撃を再現することはできなかった。これ以降も連合軍はドイツ国境地区で攻撃を継続したが、ドイツ軍の抵抗の激化と秋の悪天候に攻撃は停滞し、西部戦線は安定した。

◆Ｖ－３　破滅への電撃戦　アルデンヌ 1944年12月

1944年の秋、戦争は５年目にドイツ国境へと戻ってきていた。ドイツ軍はまだ数百万の兵員を持っていたが、老人や中学生までも召集して造りあげた軍隊が、物資、装備ともに優勢な連合軍に抵抗可能かどうかは疑わしかった。

だがヒトラーは戦争に負ける気はなかった。勝利を目前にした連合国とソ連の関係が戦後処理についての対立から悪化しつつあるのを知っていたヒトラーは、抵抗を続けて連合国間の関係をさらに悪化させるばかりでなく、ドイツ軍の大勝利によって連合国の交戦意欲を奪うことも可能であると考えていた。９月16日にヒトラーは西部戦線での反撃準備を命令したが、その場所として選ばれたのは４年前に大勝利の舞台となったアルデンヌ森林だった。

ヒトラーの計画は、連合軍機が無力化される悪天候の日の多い11月に、アルデンヌ森林を30個師団の兵力で攻撃しミューズ河を渡河、アントワープに進出して連合軍の30個師団を殲滅するというものだった。西部戦線の司令官たちは使用する兵力に比べて目標が大きすぎることから、作戦をより限定された形で実行するようもとめたが、ドイツにはあと半年戦うだけの物資しか残されていないことを知っていたヒトラーは大勝利を可能とする大攻勢に執着し、アルデンヌ攻勢はヒトラーの計画通りに実行されることになった。

攻勢に必要な兵力と物資の集積は秋を通じて続けられた。ヒトラーが厳重な機密保持を命令したこともあって、この集結が連合軍に察知されることはなかったものの、最初11月の予定だった作戦開始を12月まで延期しても、燃料をはじめとする物資の集積は充分なものではなかった。また連合軍の攻撃に対抗するためにアルデンヌ戦用の部隊が使用されたため、攻勢兵力も計画の38個師団から予備も含め30個師団にまで減少することになった。

1944年12月16日早朝、あまりの穏やかさに米軍に「幽霊戦線」と呼ばれていたアルデンヌ地区でドイツ軍の一斉砲撃がおこなわれた。１時間後に砲撃が終ると、朝霧の中を国民擲弾兵が米軍陣地に対する攻撃を開始した。米軍はこの攻勢をまったく予想しておらず、連絡線の途絶で戦況が把握できなかったため、最高司令部から最前線に至るまでの

大混乱が巻き起こった。だがドイツ軍は混乱を利用できなかった。戦闘経験のない国民擲弾兵が米軍拠点の攻略に失敗したため突破口は戦線のどこにも開かれず、後方では狭い道路に部隊が集中して起こった大渋滞のため、装甲部隊はのろのろとしか前進できなかった。

12月17日には攻勢主力第６SS装甲軍の先頭部隊パイパー戦隊は、戦線を突破し30kmを前進してスターヴローに進出した。だが第６SS装甲軍の主力は米軍の防御線を攻めあぐね、数kmしか前進できなかった。この日、最初の連合軍増援部隊がアルデンヌに到着した。

戦闘開始後３日目の18日に、やっと南部でドイツ軍は米軍戦線を突破することに成功し、装甲部隊が交通の要衝バストーニュへ前進を開始した。だが北部では第６装甲軍の主力が米軍の抵抗と困難な地形に阻止され続けたため、パイパー戦隊は前進地点で孤立していた。加えて北部の交通の要衝サン・ヴィットを米軍が保持していたため、ドイツ軍予備部隊は前線に展開することができなかった。

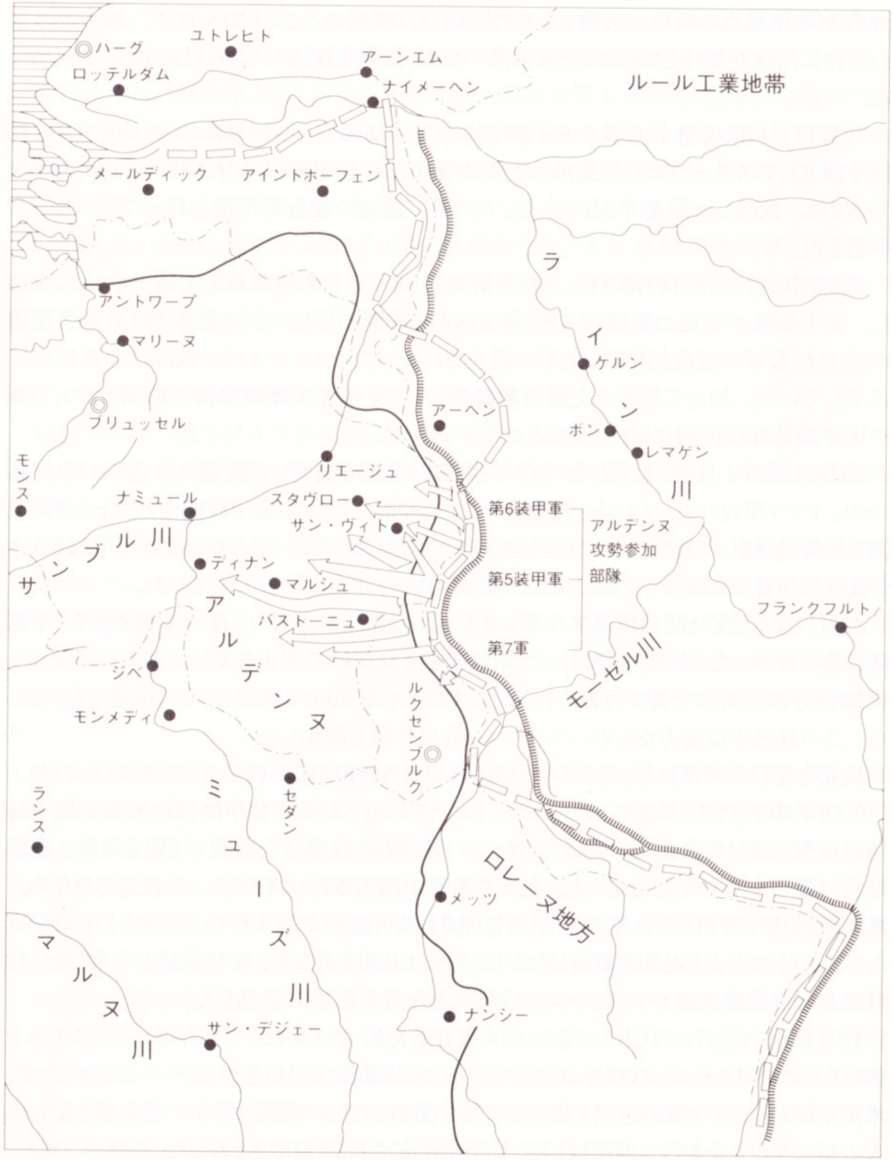
19日以降の４日間、孤立したパイパー戦隊は装備を放棄して撤退に追込まれていたものの、ドイツ軍はサン・ヴィットを陥落させ、さらに南では第２装甲師団がバストーニュ包囲した後、超越した進撃速度でミューズ河へと前進し続けていた。しかし連合軍増援も次々と戦線に到着し、連合軍の戦力はこの方面のドイツ軍を上回ろうとしていた。

23日になると攻勢開始以来アルデンヌで続いた悪天候が終り、連合軍機がドイツ軍部隊に襲いかかった。航空攻撃はドイツ軍攻勢をそれだけで阻止するものではなかったが、戦線後方の道路は空襲で寸断され、ただでさえ不足気味の補給をさらに困難なものにした。この日米軍は南方からのバストーニュ救出作戦を開始した。

攻勢を受けた米軍にとってクリスマスは喜ぶべき理由のない暗いクリスマスだったが、ドイツ軍の状況はさらに悪いものだった。ミューズに迫った第２装甲師団は米第２機甲師団の攻撃を受けて大損害を受けていたし、ドイツ軍の攻撃は全前線でも阻止され、攻撃続行は損害を増やすだけだった。加えて米軍が南方からバストーニュに接近したため、米軍戦線内に突出した攻撃部隊が逆包囲される可能性が増大していた。ドイツ軍司令官たちは攻勢の中止と退却を要請したがヒトラーは退却を許さず、攻勢継続を命令した。12月26日には救出部隊がバストーニュ守備隊と合流することに成功した。

12月最後の数日にはヒトラーもミューズ進出をあきらめていたが、連合軍にさらに出血を強いるためバストーニュ攻略を命令した。ドイツ軍は暴風雪の中をバストーニュに向ったが、米軍が同時にドイツ軍の包囲を狙った攻撃を開始したため戦闘は雪中の遭遇戦となり、多大の損害をだしながら、両軍はともに目標を達成することができなかった。

1945年１月３日には連合軍はドイツ軍突出部の北側でも反撃に転じた。ドイツ軍の戦力は１ヵ月近い戦闘で激減しており、ヒトラーも８日には突出部の部隊が包囲されるのを防ぐため、退却を命令しなければならなかった。連合軍が冬の戦いに不慣れだったこともあって、ドイツ軍の退却はだいたい成功したが、それでも数万の部隊が連合軍に包囲さ



西方防壁
9月初旬の連合軍戦線
12月15日の連合軍戦線
ドイツ軍アルデンヌ攻勢

れて壊滅した。

アルデンヌ攻勢の結果、連合軍は８万近い兵員を失い、装備や補給物資の補充の必要もあって、ライン河への攻撃を２ヵ月遅らせることになった。だがその代償としてドイツ軍は10万近い兵員と800両以上の装甲車両、弾薬ストックの2／3と大量の燃料を失った。疲弊しきったドイツにこれらを補充する能力はなく、ドイツは防御力が低下しきった状態でドイツ本土への大攻勢に立向かわねばならなかった。１月12日ソ連軍はポーランドで攻勢を開始した。

Ⅵ ベルリンへの道　1945年

東部戦線は1944年の秋にソ連軍が停止して以来、ある程度安定を保っていたが、ソ連軍はその間にドイツ本土攻撃のための兵力と物資の蓄積を続けていた。対するドイツ側はアルデンヌ攻勢に全力を投入したため東部戦線の戦力は増加せず、独ソ両軍の戦力比は歩兵で11対１、戦車で７対１、砲では20対１にまで達していた。

１月12日にヴィッスラ河畔に始ったソ連軍攻勢は短時間でドイツ戦線を崩壊させ、ソ連軍大部隊がドイツ国境に向って進撃した。17日にはワルシャワが解放され、攻勢開始２週間で、ソ連軍はベルリン前面の最後の地形障害オーデル河に到達していた。

１月末にはソ連軍はキュストリンでオーデル河西岸に橋頭堡を確保していた。キュストリンからベルリンまでの距離は50㎞ほどでしかなかったが、雪解けと補給不足のためソ連軍の前進はここで止った。

ドイツ軍はソ連軍の停止に乗じてオーデル河に兵力を集結させる一方、他のソ連軍よりも60㎞の深さでドイツ戦線内に進出したキュストリンのソ連軍を包囲し、ベルリンへの脅威を取除くための反撃を計画していた。２月15日に開始された北方ポンメルンからの反撃はほとんど進展もみせないまま３日で中止されたが、後方にドイツ軍を残したままのベルリン攻撃に不安をもったソ連軍がポンメルンの掃蕩に向ったため、ベルリン攻撃を２ヵ月近く遅らせることになった。

連合軍はアルデンヌを掃蕩するために１月中を費やしたが、２月になるとライン河西岸ラインラント地方への前進を開始した。ドイツ軍はダムを破壊し人工の洪水をひきおこしてまで連合軍を阻止しようとしたが、１ケ月近い戦闘の末ドイツ軍はライン西岸から一掃された。

ヒトラーが死守命令を乱発したことと連合軍の前進が素速かったため、多くのドイツ軍がラインラントで失われた。このため３月７日に米第１軍がレマーゲンにかかる鉄道橋を占領したときにも、ドイツ軍は即座には対抗措置をとることはできなかった。レマーゲンの橋頭堡には数個の装甲師団も投入されたが、10両余りしか戦車をもたない装甲師団に米軍をライン河に追い落とす力はなかった。３月後半にはマインツ以北のライン河に連合軍は多数の橋頭堡を確保していた。

4月になると連合軍の進撃速度はさらに加速し、ドイツ軍の主力をルール地方に包囲するとともに、米軍機甲部隊の先頭はエルベ河を渡河してベルリンに100km足らずにまで進出していた。ソ連軍は2月以来オーデル河で停止したままであり、米軍がベルリンに前進することも決して不可能ではなかったが、連合国間の取決めでベルリンがソ連軍の攻撃対象とされていたため、連合軍最高司令官アイゼンハワーは部隊にドイツ南部に向うよう命令し、米軍がベルリンに入るのは戦争終了後に持ち越されることになった。

ソ連軍のベルリン総攻撃が開始されたのは4月16日のことだった。ドイツ軍は数日に渡る抵抗を続けたが、圧倒的な戦力をもったソ連軍はドイツ軍を排除して4月25日にはベルリンを包囲した。

ベルリン市内ではSSを含む一部の部隊が絶望的な抵抗を続けていたが、ソ連軍は一軒一軒の家を掃蕩しながらベルリンの中心部へと前進を続けた。4月30日にはヨーロッパを支配したドイツ第3帝国はベルリン市内ティアガルテンとその周辺を保持するだけにまで縮小していた。同じ日ヒトラーが自殺し、3日後にはベルリン市内に残ったドイツ軍はソ連軍に降伏した。

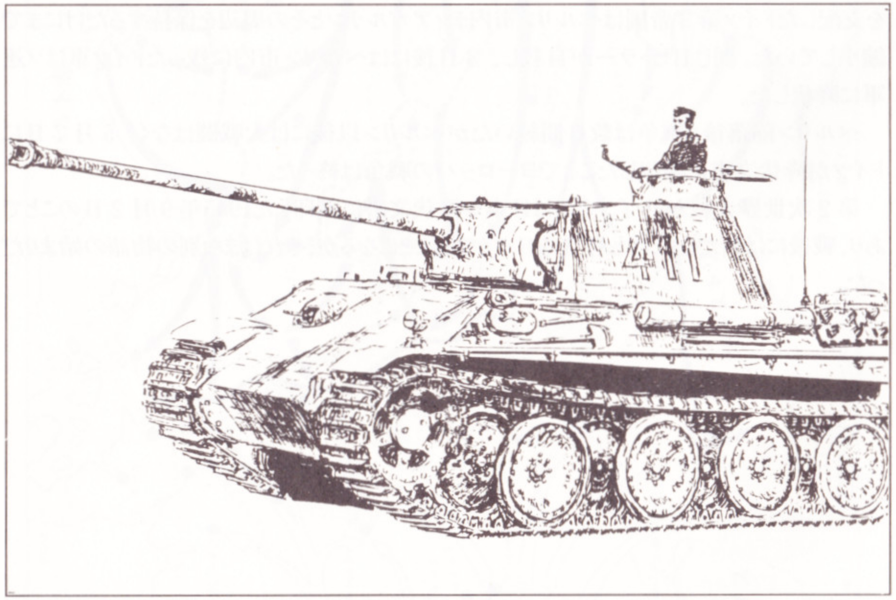
ベルリン陥落後も戦争は数日間続いたがベルリン以後には大戦闘はなく、5月7日にドイツが降伏文書に調印したことでヨーロッパの戦争は終った。

第2次世界大戦が終了するのは日本が降伏文書に調印した1945年9月2日のことであり、戦後には新たな政治と対立の日々が続くことになるが、それはまた別の物語の始まりだった。

兵器解説

枢軸軍兵器

戦車



◆II号戦車C型

III号戦車の生産が予定より遅れたため、つなぎとして量産された軽戦車。20mm砲を装備してある程度の戦闘力を備えていて、ポーランドからフランス戦にかけてドイツ戦車連隊の主力だった。戦争中期には第一線を退いて、パトロール、訓練用に使用された。また1942年以降、II号戦車の車体を利用して2種類の自走砲、105mm榴弾砲装備のヴェスペと、75mm対戦車砲を搭載したマーダーIIが生産された。

◆III号戦車E型

III号戦車の初期型A−D型は足廻りがそれぞれ異なるように増加試作型としての性格が強かったため、E型が実質的にはIII号戦車最初の量産型だった。ポーランド戦とフランス戦には小数しか参加せず、III号戦車が名実ともにドイツ戦車隊の主力となったのは「バルバロッサ作戦」以降のことだった。しかしソ連軍のT−34やKVの装甲を搭載している37mm砲では貫通することはできず、以後ドイツ戦車隊は苦闘を強いられた。

◆III号戦車J型

ヒトラーはIII号戦車の武装強化のため長砲身50mm砲の搭載を指令したが、生産されたのは短砲身50mm砲装備型だった。短砲身砲はT-34やKVに対しては効果がなく、J型の後期から主砲が長砲身に換装された。長砲身砲は600mの距離でT-34を撃破できたが、T-34はより遠距離からIII号戦車に有効弾を与えられた。だが1942年のドイツ戦車兵にはこの不利を打消す技能があり、戦車戦ではドイツ軍が優勢だった。

◆III号戦車N型

50mm砲が対戦車戦に威力不足となったことから、主砲を短砲身75mm砲に換装した車両。75mm砲は榴弾射撃の威力が大きく、成形炸薬弾頭が実用化された事で対戦車能力も向上したため、この改造は前線部隊には喜ばれた。また編成当初、タイガーの生産数の少なさから車両不足に悩んだ重戦車大隊は、III号戦車N型を装備した軽小隊を編成して車両数を増やしている。

◆IV号戦車D型

1939年秋に生産に入ったIV号戦車4番目の生産型。それまでの型式よりも装甲を強化したため、はじめて重量が20トンを越えることになった。編成当初の装甲連隊では火力支援車両として各大隊に1個中隊のIV号戦車が配属され、III号戦車では破壊不能なトーチカなどの目標に対処することになっていた。戦争後半にはIV号戦車D型の主砲を長砲身に換装し装甲を強化した車両が、装甲擲弾兵師団の戦車大隊で再使用された。

◆IV号戦車F型

短砲身75mm砲装備のIV号戦車最後の型で、戦訓により車体前面50mm、側面30mmに装甲が強化されていた。1941年6月に生産が始まり、独ソ開戦時はドイツ最新鋭の戦車だった。短砲身75mm砲はT-34の装甲を貫通することができず、零距離射撃かエンジングリルを狙わなければ、T-34は撃破できなかった。このため1942年3月には主砲を43口径長砲身の75mm砲に換装したF 2型に生産が移行した

◆IV号戦車G型

IV号戦車F2型に続いて生産された長砲身型のIV号戦車。防御、速力ではT-34に劣っていたが、搭載した43口径75mm砲は1,000mの距離でT-34に有効弾を与えることができ、この戦車の配備でドイツ軍はT-34とようやく互角に戦える戦車を持つことになった。1942年、東部戦線での夏期攻勢に参加した戦車連隊のIV号戦車中隊は、ほぼ同数の短砲身と長砲身の車両で編成されていた。

◆IV号戦車H型

1943年から生産された型で車体前面の装甲を80mmに強化し、1・2kmの距離からT-34に有効射弾を与えられる48口径の75mm砲を装備していた。T34／85やJS IIが登場するとIV号戦車は苦戦を強いられるようになったが、パンサーやタイガーの生産量は前線の要求に応じるだけの数はなかったため、旧式化したIV号戦車は終戦までドイツ装甲部隊の中核であり続けた。

◆パンサーD型

ドイツ軍がT-34以上の性能を目標に開発した中戦車。設計当初のT-34をコピーする案はドイツの技術で車載ディーゼルエンジンが製作できなかったため実行されなかったが、避弾径始の良い車体はT-34に強い影響を受けたものだった。D型はクルスク戦に投入されたが、充分な試験なしに使用されたため故障が続発し、作戦開始時の300両が1週間で行動可能なもの16両にまで減少した。

◆パンサーG型

D，A型に続いて生産されたパンサーの最終生産型。車体側面の装甲を以前の型よりも厚い1枚板に変更し、航空攻撃の防御に上面装甲を強化するなどの戦訓による改良が加えられ、パンサー系列最大の欠点である駆動部の信頼性も向上していた。パンサーG型は戦争末期には戦車連隊の装備車両の半数を占めるようになっていたが、乗員の訓練不足や燃料の欠乏から、パンサーG型が本来の高性能を発揮した機会は少なかった。

◆タイガーI

1942年8月、レニングラード戦に登場した重戦車。初陣では戦車に不向きな湿地に投入されたため戦果をあげなかったが、チュニジア及び東部戦線での防御戦で88mm砲の威力を生かして活躍した。当時の連合軍戦車の砲ではタイガーIの重装甲を撃破することは困難で、タイガーIは連合軍兵士の恐怖の的となった。大重量のため路外機動性が低いことと燃料消費率の高さがタイガーIの欠点だった。

◆タイガーII

88mm対戦車砲改造の88mm砲を搭載した重戦車。タイガーの名を持っていたが、傾斜装甲を採用した車体など、実際にはパンサーの重装甲改良型というべき車両だった。タイガーI以上に行動距離は短く、1944年12月のアルデンヌ戦で、攻撃時には戦況に何の影響も与えなかったタイガーIIが、退却時は連合軍の追撃阻止に威力を発揮したことに示されるように、タイガーIIは本質的に防御用兵器でしかなかった。

◆エレファント

タイガーI型の競作で不採用となったポルシェ製の車体を利用して製造された駆逐戦車。エンジンで発電機を回し、そうして得られた電気でモーターを駆動させるという特殊な動力を採用していた。クルスク戦で実戦に参加し、200mmの装甲と88mm砲の威力は戦車には無敵だったが、車体機銃を持たないため歩兵の肉迫攻撃に弱点をさらした。その後の後退戦闘では対戦車戦にかなりの戦果を残している。

◆III号突撃砲B型

突撃砲の名前通り歩兵の攻撃支援が任務の自走砲で、装甲された戦闘室に短砲身の75mm砲を装備していた。フランス戦に少数の試作型が参加したのが最初の実戦だった。独ソ戦で対戦車兵器の主力37mm砲がソ連戦車の重装甲に無力だったことから、突撃砲が対戦車任務に活躍することになった。このため1942年以降は対戦車戦能力を重視した長砲身75mm砲装備型に生産が移行した。

◆III号突撃砲G型

III号突撃砲の最終生産型で、1943年以降各戦場で活躍した。突撃砲は砲兵に所属することになっていたが、このころになると戦車の損耗が著しく、戦力を維持するため突撃砲が戦車連隊内に中隊、場合によっては大隊単位で装備されるようになった。また本来の任務である歩兵支援用に105mm榴弾砲を搭載した型も製造された。III号突撃砲の総生産数は8,000両に達し、III号戦車の生産数を上回った。

◆IV号駆逐戦車

IV号戦車の車体に背の低い戦闘室をもうけ75mm砲を装備した駆逐戦車。初期型はIV号戦車と同じ48口径の砲を装備していたが、後期型ではパンサーに使用された70口径のものを搭載した。後期型はノルマンディー戦末期から実戦に参加したが、その最初の戦闘で、1個中隊のIV号駆逐戦車が5分間の戦闘で40台のM4を破壊するという大戦果をあげた。

◆ヤクトパンサー

パンサーの車体前部にもうけた戦闘室に対戦車砲改造の88㎜砲を搭載した駆逐戦車。パンサーで故障の多かった足廻りも信頼性の高い部品に換装され88㎜砲の高性能もあって優秀な駆逐戦車だった。生産量は500両に達せず、重装甲猟兵大隊中の一個中隊がヤクトパンサーで装備されただけだった。戦争末期にはパンサーの代用として一部の戦車連隊でも使用された。

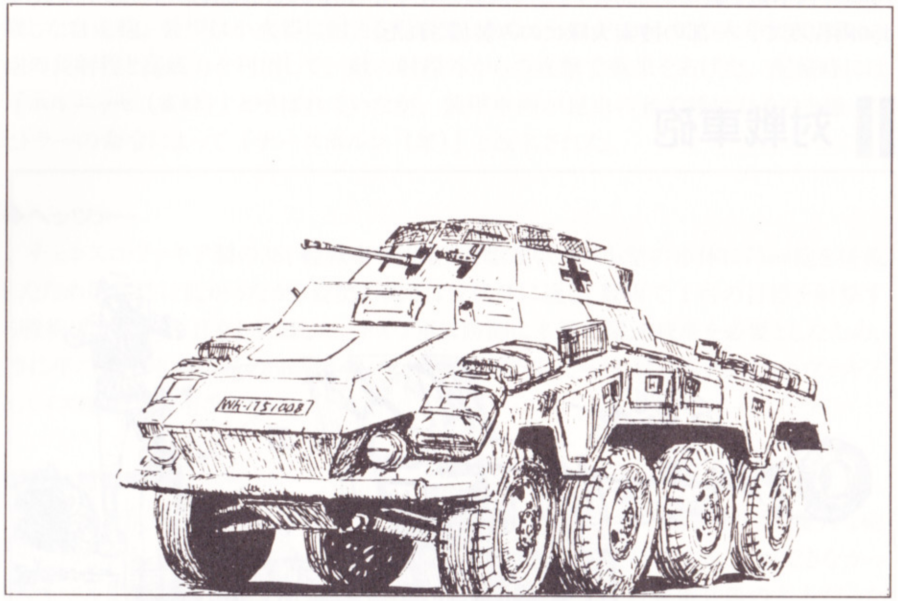
◆ヤクトタイガー

タイガーⅡの車体に対空砲を改造した128㎜砲を搭載した駆逐戦車。70両(一説では48両)しか生産されず、1個大隊あたり20両前後を装備するのがやっとだった。128㎜砲は4㎞の遠距離でM4を破壊する威力を有し、戦闘室前面で250㎜の重装甲を施した車両だったが、70tに達する重量のため機動性は低く、装甲の薄い側面や後面に回り込んだ敵戦車によって撃破されることも多かった。

◆M-13

イタリア軍は開戦時には機関銃装備の軽戦車しか装備しておらず、これがエジプトでの大敗北の要因の一つともなっていた。このため戦車装備の充実を急いだイタリア軍が、最初に装備した本格的な戦車が、M-13だった。イタリア軍はM-13とその発展型で戦争を戦い抜いた。M-13系列最後のM-15は長砲身の47㎜砲を装備していたが、M-15の登場前にイタリアは降伏した。

Ⅱ 装甲・偵察車両



◆PSW231

同名の6輪装甲車の後継車として製造された8輪装甲車。装甲捜索大隊の主要車両としてポーランド戦以降、1943年頃まで使用された。8輪全輪駆動で、敵直前から離脱するさい、前進と等スピードのバックを可能とする後進用ハンドルを車体後部に備えていた。この車両の能力もロシアのの泥と雪には不十分なものでしかなく、東部戦線の捜索大隊の車両の一部は後に装甲ハーフトラックに置きかえられた。

◆PSW234/2

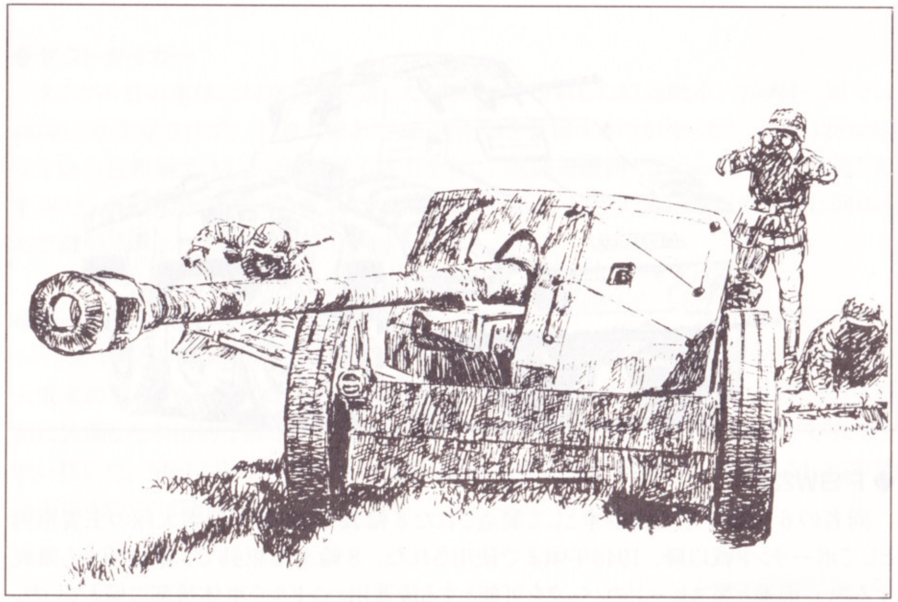
SPW231の後継車両として1940年に開発が始められた8輪装甲車。試作に終わった軽戦車レオパルト用の50㎜砲装備の砲塔を搭載していた。航続距離を伸ばすため空冷ディーゼルエンジンを装備したが、エンジン開発がトラブルの連続で遅れたため生産開始は1943年秋にまでずれ込んだ。50㎜砲は偵察任務には不必要で対戦車戦には火力不足だったため101両で生産は終了した。

◆PSW234/1

234/2の砲塔を対空射撃も可能な20㎜砲を装備した上部開放型の砲塔に換装した車両で、1944年夏頃から前線に登場した。またこの頃になると捜索大隊は偵察だけでなく防

御も主任務となった事から、上部開放型の戦闘室に単砲身の75mm砲を搭載した234/3、75mm対戦車砲を装備した234/4などの武装強化型が生産された。234系列の総生産数は450両程度で、一部の捜索大隊にのみ装備された。

対戦車砲



◆Ⅰ号駆逐戦車

Ⅰ号戦車の砲塔を取り去った後に後部解放型の戦闘室をもうけ、チェコスロヴァキア製の47mm対戦車砲を搭載した、ドイツ最初の駆逐戦車。1940年春に装甲猟兵大隊に配属されて、フランス戦から実戦に参加した。その後北アフリカ、東部戦線でも使用されたが、47mm砲ではソ連軍重戦車の装甲を貫通できなかったため、1941年中には前線から後退させられた。

◆マーダーⅢ

重装甲のソ連戦車を破壊するための対戦車砲としてドイツ軍は75mm砲を採用し、加えて東部戦線での経験から雪や泥濘でも迅速に砲を移動可能とする自走砲が要求された。この要求をみたすため開発されたのがマーダーⅢだった。マーダーⅢは1942年5月頃から前線部隊に配備されたが、初期型では75mm対戦車砲の生産が間に合わなかったため、鹵獲したソ連製76mm野砲が搭載されていた。

◆ナースホルン

Ⅳ号戦車の車体後部に上部開放式の戦闘室をもうけ対戦車砲を改造した88mm砲を搭載した自走砲。装甲は小火器に耐える程度でしかなかったが、ロシアの大草原では88mm砲の長射程と高威力を利用して、敵の射程外からの攻撃で戦果をあげた。配備時には「ホルニッセ（雀蜂）」と呼ばれていたが、装甲車両が昆虫の名で呼ばれるのを嫌ったヒトラーの命令によって「ナースホルン（犀）」と改名された。

◆ヘッツァー

チェコスロヴァキア製の38t軽戦車を使用した駆逐戦車。小型の車体に75mm砲を搭載したため居住性は低かったが、姿勢の低さは待伏せに適し、数両で1台の目標を射撃する戦術によってJS Ⅱをも撃破した。ドイツ軍は防御に多量の駆逐戦車を必要としたため、1945年の装甲車両生産の60%はヘッツァーになる予定だった。戦後もチェコスロヴァキアとスイス陸軍で使用された。

◆37mm対戦車砲

ドイツ軍が使用した37mm対戦車砲は各国の同口径の砲に多大の影響を与えた優秀な砲だったが、フランス戦ではマチルダなどの英仏戦車の重装甲を破壊することができなかった。「バルバロッサ」作戦開始時にも数量では37mm砲がドイツ対戦車兵器の主力だったが、KVやT-34にはまったく無力だった。その後、砲身に挿し込んで使用する成型炸薬弾頭の実用化で近距離用対戦車兵器として使用された。

◆50mm対戦車砲

37mm対戦車砲の後継として開発された対戦車砲。「バルバロッサ」作戦から実戦に参加したが、T-34やKVとの遭遇で苦戦を強いられることになった。特にKVに対してはまったく無力で、配備早々に2線級兵器へと転落することになった。それでも1942年中は対戦車兵器の主力であり続けた。戦争後半にはこの砲の砲架に、旧式のフランス製75mm砲の砲身を搭載したPak38/97が生産された。

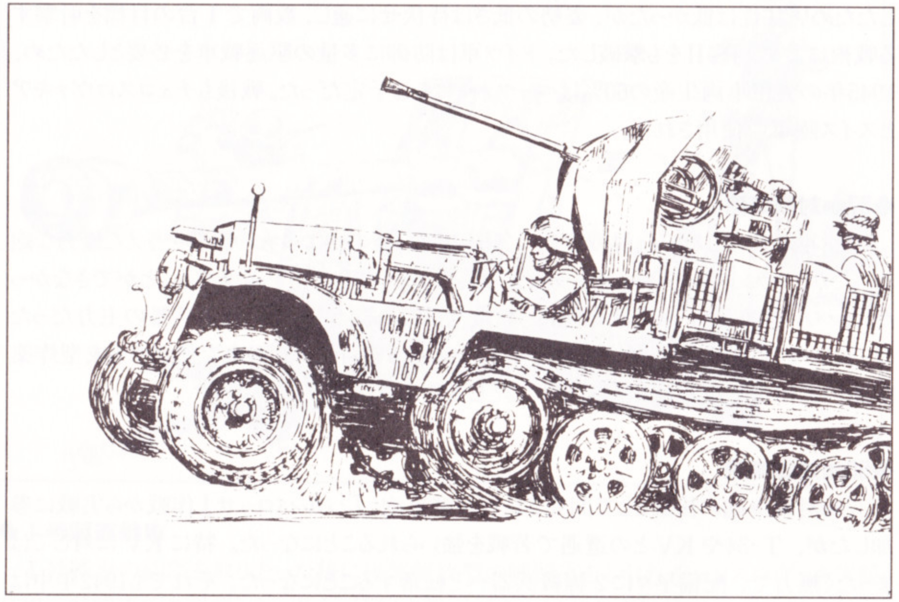
◆75mm対戦車砲

50mm砲の後継として開発された砲で1942年から実戦に参加した。多用されたラインメタル社製の砲は50mm砲を大型化した設計のものだった。1,000m以上の距離でT-34に有効弾を与えられる優秀な砲だったが、大重量のため人力では短時間での配置転換や移動が困難なのが欠点だった。この砲はまたマーダー対戦車自走砲の主砲としても使用された。

◆88mm対戦車砲

1943年に登場した対戦車砲で88mm対空砲より長大な砲身を持ち、登場時には全連合軍戦車の装甲を2,000m以上の距離で貫通できる高性能の砲だった。十字型の砲架が360度の射界を与えていた。砲身が砲架より多量に生産されたため、105mm野砲の砲架や150mm砲の車輪を88mm砲身と組合せた型も生産された。ソ連軍は鹵獲したこの砲を使ってタイガーを射撃した。

対空砲・対空車両



◆20mm対空砲

もともと海軍艦艇用の対空砲として開発された砲で、改良型や弾丸の発射量を増やすための4連装型共々、開戦時から敗戦までドイツ対空部隊の主要装備として使用された。ドイツ対空部隊は編成当初から地上目標の射撃も任務としており、ハーフトラック搭載の20mm自走砲などで機械化された対空部隊は、戦争初期には戦車隊と行動可能な数少ない部隊として攻撃支援などをおこない、戦争後半には防御に多用された。

◆37mm対空砲

戦争初期に使用された37mm砲がやや低性能で88mm砲並の8名の兵員を必要としたため、ドイツ軍は20mm砲を対空砲として多用した。しかし戦争後半になって連合軍機の耐久力が増大すると20mm砲は威力不足になったため、弾丸の威力の大きい37mm砲の改良型が再使用されるようになった。20mm砲同様、ハーフトラックに搭載された自走タイプが存在する。

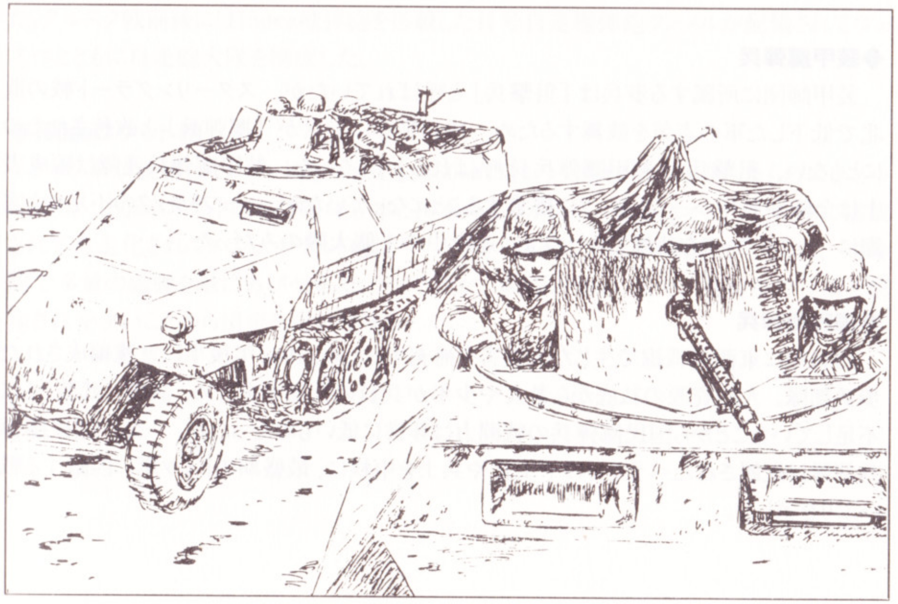
◆88mm対空砲

対空砲ながら最初から地上射撃も任務とされており、セダンでのミューズ渡河作戦で88mm砲がドイツ戦車隊を支援したことにみられるように機械化された対空砲部隊は野砲の代役をつとめることも多かった。また連合軍重戦車を撃破可能な数少ない砲だったため対戦車戦にも多用されたが、もともと対空砲として設計された88mm砲は姿勢が高く防御も不十分だったため、損害を受けることも多かった。

◆FPz Ⅳ

戦争後半になって連合軍が制空権を獲得すると対空砲は兵器として重要性を増してきた。特に戦車部隊用に戦車と同じ路外性能を持った車両が必要なため、Ⅳ号戦車の車体を利用した対空戦車が開発された。最初に生産された37mm砲搭載型は防御が不十分だったため、上部解放式の回転砲塔に4連装20mm砲か37mm砲を装備した型が開発された。FPz Ⅳの総生産数は500両程度で前線の要求には十分に応じきれなかった。

兵員



◆歩兵Ⅰ／歩兵Ⅱ

枢軸軍の一般歩兵部隊。「歩兵Ⅰ」は枢軸軍の1939～42年頃の歩兵部隊の能力に基づき、「歩兵Ⅱ」は1943～45年頃の歩兵部隊に基づいている。枢軸国軍の歩兵部隊中、ドイツ軍歩兵は開戦時には戦術、訓練ともに世界最高の歩兵だったが、戦争の長期化でベテランの兵が減るとその質は低下した。また他の枢軸国軍歩兵は、装備、訓練などすべての面で劣悪だった。

◆装甲工兵

装甲師団に所属する工兵で、地雷の除去や河川への架橋、火炎放射器と爆薬を使用した敵拠点の排除が主要任務だった。独ソ戦初期にはT－34やKVを撃破できる対戦車兵器が少なかったため工兵は爆薬を使用しての肉迫対戦車攻撃をおこない、戦争後半には歩兵同様に防御戦を戦った。これら予定外の任務による損失と工兵資材の欠乏のため、戦争末期には工兵の能力がいちじるしく低下することになった。

◆自動車化歩兵

一般歩兵と異なり、部隊に配備されたトラックやオートバイを移動に使用する歩兵部隊。トラックの路外性能では戦車と統一行動をとることは困難だったが、戦車隊のスピードに追随できる部隊として装甲師団の側面援護などに活躍した。戦争後半には自動車不足のため、一部の自動車化歩兵部隊は一般歩兵部隊に改編された。また戦争末期に燃料事情が逼迫すると、自動車化歩兵は移動手段として自転車を使用するようになった。

◆装甲擲弾兵

装甲師団に所属する歩兵は「狙撃兵」と呼ばれていたが、スターリングラード戦の敗北で低下した軍の志気を鼓舞するため、1943年春に歩兵が「擲弾兵」と改称されたのにともない、狙撃兵も「装甲擲弾兵」と呼ばれるようになった。装甲擲弾兵連隊は編成表上は全隊が装甲ハーフトラックに搭乗することになっていたが、ハーフトラックの不足から実際にハーフトラックを装備できたのは、連隊中の１個大隊のみだった。

◆国民擲弾兵

1944年に東西両戦線で生じた大損害を補充するため、1944年後半に急遽編成された歩兵部隊。人的資源の払底から老人や少年が兵員の大部分を占め、訓練、武装ともに不足していたことから国民擲弾兵の戦闘力は非常に低いものだったが、一部の国民擲弾兵部隊は配属されたベテランの下士官や兵士を中核に、最盛期のドイツ軍に匹敵する戦いぶりを示した。

◆降下猟兵

空挺部隊をドイツ軍は降下猟兵と呼称した。1940年のフランス戦では500人の降下猟兵が、10倍のベルギー兵が守備するエバン・エマール要塞を攻略するという快挙を成し遂げた。しかし1941年のクレタ降下作戦で降下猟兵部隊に1／3に及ぶ損害が生じたため、以後ドイツ軍は大規模な空挺作戦を実行することはなかった。戦争後半、降下猟兵は精鋭歩兵部隊として、しばしば激戦地に投入された。

Ⅱ 砲兵

◆105㎜野砲

前線部隊に所属して野戦に参加する砲を通称野砲と呼ぶ。105㎜砲は各国で野砲の中核をなす存在でドイツ軍でもそれは例外でなかった。装甲師団に所属する装甲砲兵連隊は機動性を重視したこともあって、最初は105㎜榴弾砲のみで編成されていた。1942年後半以降、105㎜榴弾砲搭載のII号自走砲ヴェスペの装備によって、装甲砲兵連隊の１個大隊が自走化された。

◆155㎜野砲

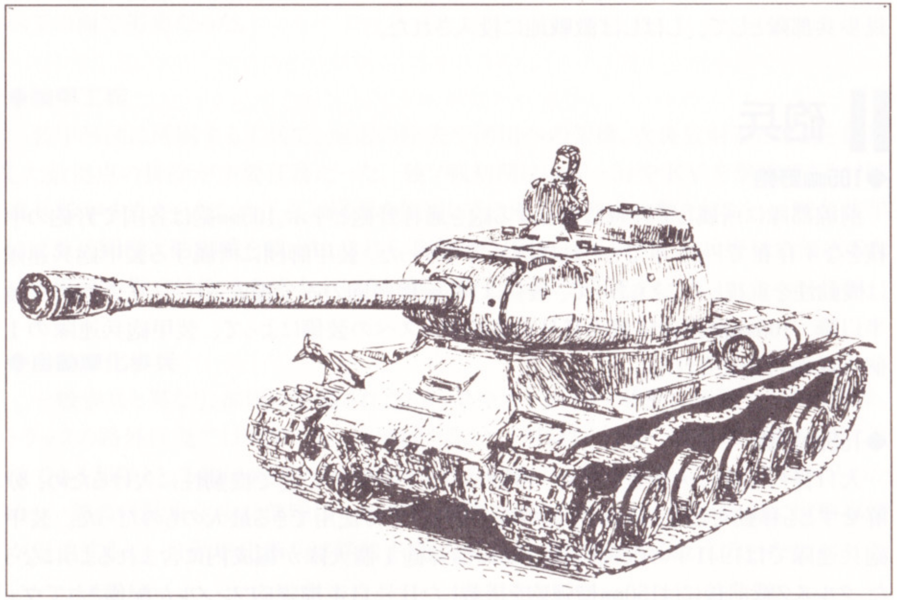
大口径の重砲は大重量のため、移動に際して分解が必要で機動性に欠けるため、分解せずとも移動可能な155㎜クラスの砲が野砲として使用できる最大のものだった。装甲砲兵連隊では1941年の改編以後、150㎜榴弾砲１個大隊が編成内に含まれるようになった。クルスク戦前後には150㎜榴弾砲を搭載したII号自走榴弾砲フンメルが配備されてヴェスペとともに自走砲大隊を構成した。

◆150㎜ロケット砲

ドイツ軍が使用したロケット砲の中でも、150㎜口径の発射機は多用されたもののひとつだった。150㎜ロケット砲には砲身６本と10本のものがあり、後者はハーフトラックに搭載されて自走化されていた。ロケット砲はパニックを引き起こすほどの発射音とともに、短時間で多量の砲弾を敵にあびせることができたが、射程が短いことや、発射炎で位置を察知されやすいことから損害を受けやすかった。

連合軍兵器

戦車



◆ BT-7

1929年にソ連に輸入されたアメリカ製のクリスティー戦車は、キャタピラと車輪の二種類の走行方法を持ち車輪走行時には100㎞を越すスピードを出すことができた。この戦車を参考にして騎兵部隊の長距離作戦用としてBT(快速戦車)のシリーズが製造され、BT-7はその最後の量産型だった。後期生産型のBT-7Mはソ連戦車として燃費の良いディーゼル・エンジンを最初に搭載した車両だった。

◆ T-26

ソ連は戦車国産の参考用に4種の戦車を1929年に輸入した。T-26はこのうちヴィッカース社製の6t軽戦車を参考にして製造された。横に並んだ二個の銃塔を持ったA型、回転砲塔に37㎜砲を搭載したB型が生産され、37㎜砲は後に47㎜砲に換装された。避弾径始の良い改良型車体のS型が最終生産型だった。独ソ開戦時、ソ連機甲部隊は装備を旧式化したT-26やBTからT-34やKVに交換中だつた。

◆ T-28C

1930年代には各国で多砲塔戦車が試作されたがソ連軍は特に開発に熱心だった。T-28もその一つでヴィッカース社製の16t中戦車を参考にした車両だった。武装は主砲塔に短砲身の76㎜砲を主砲塔に搭載し、車体前部に2個の機銃塔を備えていた。その後もソ連軍はT-35、SMK、T-100といった多砲塔戦車を製造したが、重量過大と馬力不足から実戦で戦果をあげることはなかった。

◆ T-34/76

BT戦車の経験を生かしてソ連が開発した中戦車。76㎜砲を搭載し、45㎜の傾斜装甲、50㎞を超す最高速度など、出現当時の1940年には比較の対象のない高性能の戦車だった。「バルバロッサ」作戦の時点では少数しか配備されておらず、前線にあったT-34も各個投入から各個撃破されたが、ドイツ軍対戦車兵器がT-34に対して無力だったことがドイツ軍にT-34パニックをひきおこした。

◆ T-34/76D

1942年後半に生産に入ったT-34/76の改良型。T36/76の砲塔後部の大きな張り出し部分がドイツ兵の爆薬による肉迫攻撃を受けやすかった点を解消するため、砲塔後部を短くし、代りに高さをあげて砲塔内の容積を確保した6角形の鋳鋼製砲塔を装備していた。「ロジーナ（祖国）」の愛称通りに、T-34はソ連戦車隊の主力として戦争を闘いぬき、ソ連勝利の原動力として活躍した。

◆ T-34/85

T-34/76の欠点のひとつに、砲塔が2人用で戦車長が砲手を兼ねるため、主砲の発射速度が遅いことがあった。これを解消するとともに重装甲のドイツ新型戦車に対抗するため、大型の3人用砲塔に対空砲改造の85㎜砲を搭載したのがT-34/85だった。1944年2月のコルスン包囲戦から実戦に参加してパンサーやタイガーの好敵手となった。T-34/85は現在も世界各地で使用されている。

◆ SU-85

T34の車体上に戦闘室をもうけ、対空砲改造の85㎜砲を搭載した駆逐戦車。「SU」は自走砲を意味するロシア語の頭文字をとった名称だった。ソ連軍はSU-85で駆逐戦車連隊を編成して戦車隊の攻撃時に火力支援を与え、防御では姿勢の低さを利用しての待伏せ攻撃でドイツ戦車に対抗した。1944年後半には姉妹型、100㎜カノン砲を搭載したSU-100も登場した。

◆SU-122
T34の車体を改造して、122㎜榴弾砲を搭載した駆逐戦車。ソビエトの駆逐戦車としてはもっとも早く、1943年前半に戦線に登場した。SU-122はクルスク戦に使用されたが、122㎜榴弾砲は対戦車戦闘用には威力不足だったことから、1944年初頭に他の駆逐戦車が部隊に配備されるようになると、SU-122は前線から後退した。

◆SU-152
1943年1月にタイガーを破壊可能な能力を持つ車両として開発が命じられた重駆逐戦車。設計は1ヵ月足らずで終了し、7月のクルスク戦が初陣だった。KV戦車を改造して前部にもうけた大型の戦闘室に152㎜榴弾砲を搭載していた。この砲は500～1,000mの距離で124㎜の装甲貫徹力を有しており、タイガーⅠの装甲を撃破することも可能だった。

◆JSU-122
JS重戦車の車体を利用した重駆逐戦車で、車体前部の大型戦闘室に500～1,000mの距離で145㎜の装甲貫徹力を持った122㎜砲を搭載していた。JSU-122は1944年初頭から駆逐戦車連隊に配備されてドイツ重戦車に対抗し、攻撃時の火力支援を行なった。戦争末期にはタイガーⅡを破壊するために武装の交換も計画されたが、これは実行されなかった。

◆JSU-152
SU-152の後継車両として、JS重戦車の車体を改造して152㎜榴弾砲を搭載した重駆逐戦車。砲の操作性を高めるため戦闘室がSU-152より大型化していたのが外見上の特徴だった。JSU-152は攻撃時の火力支援に活躍しただけでなく、152㎜砲の高威力をいかしてタイガーやパンサーを破戒したことから、「猛獣殺し」と呼ばれてソ連兵に愛された。

◆KV-1
各種多砲塔戦車の実用性が低かったため、重装甲と機動性の向上を目標として開発された重戦車。車名のKVは当時の国防相クリメンティー・ヴォロシーロフの頭文字を取ったものだった。独ソ開戦時には500両程度が装備されていただけだった。当時のドイツ軍兵器では88㎜対空砲の水平射撃のみがKVを撃破できたが、防御のない88㎜砲は返り打ちに遭うこともあり、KVはドイツ兵の恐怖の的となった。

◆JS Ⅱ
タイガーⅠを撃破するためソ連軍が開発した重戦車で、車両名のJSは当時のソ連首相ヨーシフ・スターリンの頭文字をとったものだった。JS Ⅱは1944年2月のコルスン包囲戦から実戦に参加し、タイガーやパンサーをも上回る性能を発揮した。ソ連軍は新兵の多い親衛戦車連隊にJS Ⅱを配備したため、ベテランのドイツ戦車隊に苦戦することもあったが、JS Ⅱはベルリン進撃までソ連戦車隊の破城槌として活躍した。

◆ルノーR35
歩兵支援用の軽戦車で数量的にはフランス軍戦車の主力だった。Ⅱ号戦車と同クラスの重量車両ながら45㎜の装甲はⅣ号戦車D型をも上回るものだった。しかし重装甲の代償として航続距離が短く、実戦では戦場に到着する前に燃料切れになることもしばしばだった。くわえて各車両に無線機が装備されていないため戦場での行動力は低く、性能の劣るドイツ戦車を阻止することができなかった。

◆シャールB1
車体前面に75㎜砲を搭載し、砲塔に37㎜もしくは47㎜砲を搭載したフランスの重戦車。75㎜の射界は限定されていたが、油圧を利用した操向装置によって短時間での方向転換を可能としていた。ドイツ戦車の砲では破壊不能の重装甲を持ち、装備されたどちらの砲もドイツ戦車には有効だったが、軍自体の混乱もあって、シャールB1が戦場で能力を発揮することはなかった。

◆スチュアート
米軍が第2次大戦前に開発したM2軽戦車を改良したもので正式名はM3軽戦車。英軍所属の車両が「クルセイダー」作戦に参加したのが最初の実戦だった。高速だったが防御力は弱く、ドイツ戦車に対抗する事は出来なかった。偵察用戦車として戦争を通して使用され、エンジンを強力な物に換装し車体を避弾径始のよいものに改良したM5軽戦車へと発展した。

◆M10
チュニジア戦から登場した米軍の駆逐戦車。対空砲を改造した76㎜砲を上部開放型の回転砲塔に搭載し、やや防御は弱かったものの速度は50㎞と高速の車両だった。米軍はM10装備と牽引式対戦車砲の大隊で混成した対戦車群によってドイツ戦車に対抗した。重装甲のタイガーを撃破するには76㎜砲では多少威力不足だったため、英軍は主砲をより高威力の17ポンド（90㎜）砲に換装し、米軍はジャクソンを開発した。

◆ジャクソン

M10の武装を強化するため、対空砲を改造した90mm砲を搭載した新型の上部開放型砲塔にをM10の車体に装備した駆逐戦車。1944年秋から実戦に参加した。1944年12月のアルデンヌ戦で、ジャクソン装備の第740戦車大隊がパンサーを主力とするSS部隊を撃破したことに示されるように、ジャクソンはドイツ重戦車を確実に破壊できる唯一の兵器として活躍した。

◆パーシング

タイガーやパンサーの登場で失われた戦車性能の優越を回復するために米軍が開発した重戦車で、主砲の口径は90mmもあり、その上88mm砲の直撃に耐える重装甲を備えていた。1945年1月に20両の試作車が、実用試験のためヨーロッパ戦線に投入されたがドイツ装甲部隊がすでに崩壊状態だったため大規模な戦闘に参加することはなかった。またパーシングは戦後の米軍主力戦車M48～60パットンシリーズの原型となった。

◆M3/グラント

第2次大戦開戦当時、戦車装備の少なかった米軍が急遽開発した中戦車。開発を急いだため75mm砲搭載可能な砲塔を製造することができず、75mm砲は自走砲なみに車体に直接装備された。37mm砲搭載の副砲塔を改造したものがグラントの名で英軍に使用された。援助品としてソ連にも送られたが、ソ連兵は「7人兄弟用の棺桶」と呼んで軽蔑したと言われる。北アフリカで使用されただけでM 4と交代した。

◆M4/75

リーに続いて米軍が開発した中戦車。開発時に高出力のエンジンが入手できず、航空機用の星型エンジンを搭載したため全高の高い車両となった。1942年のエル・アラメイン戦以降実戦に参加した。米軍だけでなく英仏戦車隊も主要装備としたばかりか、ソ連にも多量のM 4が援助として送られ、M 4はジープと共に連合軍の標準装備となった。M 4系列の総生産数は5万両に達している。

◆M4/76

M 4に装備された75mm砲が重装甲のドイツ戦車には威力不足となったため主砲を76mm砲に換装したのがM4/76で、1944年2月から生産が開始された。76mm砲の榴弾射撃の威力は75mm砲より小さいため、前線部隊は最初M4/76への交換を嫌がったが、後にはドイツ重戦車への対抗手段として装備を熱望した。「ジャンボ」と呼ばれるヴァリエーションは装甲を最大で178mmに強化して、ドイツ戦車に対抗した。

◆クルセイダー

ソ連のBT戦車の高速性能にショックを受けた英軍は、BT戦車と同じクリスティー式のサスペンションを使用した巡航戦車を製作したが、クルセイダーもそのなかの一つだった。1941年6月に北アフリカで実戦に参加したが、エンジンや足回りに故障が続発し、前線部隊での評価は極端に低かった。エル・アラメイン戦前後まで英軍戦車隊の主力車両だったが、グラントやM 4の配備が進むとクルセイダーは前線から退いた。

◆マチルダ

英軍は戦車戦用の巡航戦車と歩兵支援用の低速重装甲の歩兵戦車の2種類に大別しており、マチルダは英軍の開発した2種類めの歩兵戦車だった。フランス戦でアラスでの反撃に参加したマチルダは、対戦車砲弾を重装甲で跳ね返し対戦車砲を蹂躙して前進を続けたが、88mm砲の水平射撃には対抗できなかった。マチルダは北アフリカでも使用されたがここでも88mm砲の前に敗北した。

◆バレンタイン

英軍の歩兵戦車で1941年後半から実戦に参加した。装甲は厚かったが、低速のため高速の車両と共同行動をとるのは困難だった。また主砲の2ポンド砲は榴弾を発射できないため、歩兵戦車として歩兵を支援するにも能力は不十分だった。後期型は砲塔内の乗員を3人から2人に減らして6ポンド砲や75mm砲を搭載をした。ソ連に送られたバレンタインは故障の少なさからソ連兵に愛用された数少ない西側戦車となった。

◆ファイアフライ

連合軍戦車の主力M 4の75mm砲がパンサーとタイガーの重装甲に無力だったため英軍は自国製の17ポンド砲を搭載した車両をファイアフライとして採用した。砲の供給が遅れたため最初は1中隊に1両しか装備されなかったが、後半にはその割合は2両に1両程度にまで増加した。ドイツ軍はファイアフライを優先的に破壊するように命令を出すほどファイアフライの威力を恐れていた。

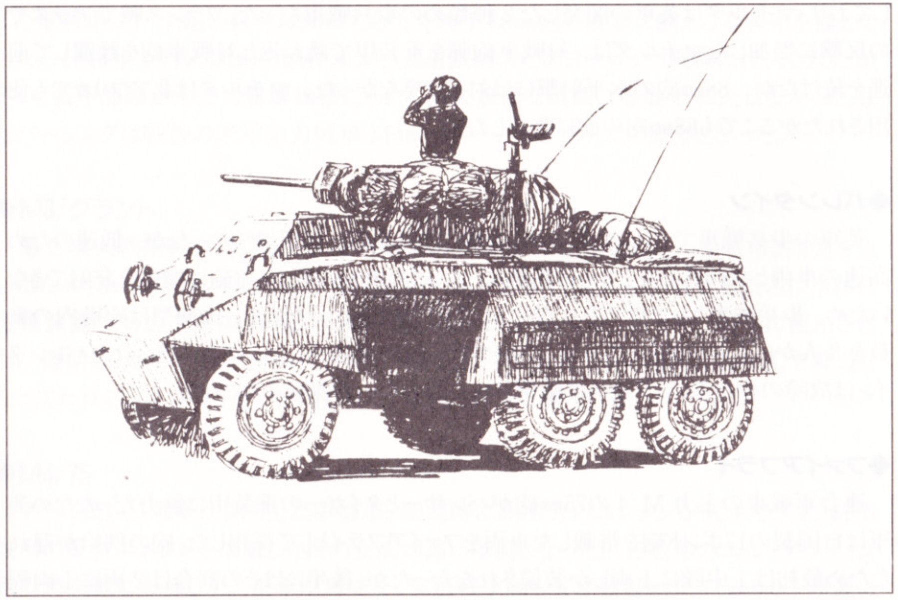
◆クロムウェル

クルセイダーの後継車両として開発された巡航戦車。航空機用エンジンを改造したロールス・ロイス、ミーティア・エンジンの生産が遅れたため、生産がスタートしたのは1943年のことだった。このころにはアメリカからM 4が大量に供与されていたこともあって、クロムウェルはおもに偵察連隊に配属されることになった。クロムウェルの武装は6ポンド砲から75mm砲、歩兵支援用の95mm榴弾砲と強化された。

◆チャーチル

英軍が実戦に投入した最後の歩兵戦車。最大で100㎜を越す重装甲を持ち、砲塔の2ポンド砲も後期型では75㎜砲に換装されたが、低速のため対戦車戦には適していなかった。チャーチルをベースにして改造された架橋戦車や火炎放射戦車、鉄板を巻いたローラーを装備した仮道敷設車などの特殊車両はノルマンディー上陸作戦で活躍したほか、都市攻略にも使用された。

装甲・偵察車両



◆M8

米軍の6輪装甲車。最初37㎜対戦車砲装備の戦車駆逐車として使用される予定だったが、戦車の重装甲化に37㎜砲が威力不足となったため、偵察車両として採用された。6輪駆動で路外行動力は高かった。派生型として12.7㎜重機関銃一丁のみを装備した兵員輸送、指揮車両として使用されたM20がある。M 8は英軍でも使用され、グレイハウンドとのニックネームがつけられた。

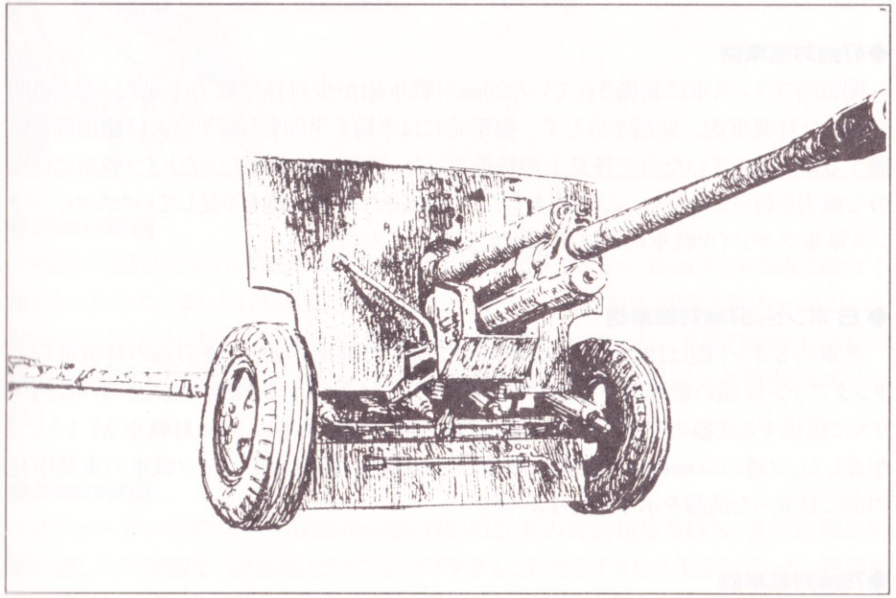
◆ダイムラー

シャーシフレームを持たず、車体下部の装甲板にエンジン、トランスミッション等の駆動系統をボルト止めした、特殊な車体構造の英軍4輪装甲車。後進ハンドルを装備して敵前からの緊急離脱が可能だった。偵察連隊に装備されて1942年北アフリカ戦線に登場した。他の英軍装甲車が機銃装備だったのに対して、テトラクト軽戦車の砲塔を流用したダイムラーは2ポンド砲を搭載していたため、偵察部隊の兵士に愛用された。

◆BA-32

フォード6輪トラックのソ連製コピー、GAZトラックのシャーシ上に装甲ボディーを乗せた装甲車。1930年代に実用化され、スペイン内戦、ノモンハン事件で実戦に参加した。車体後部の回転砲塔に37㎜砲、後期型では45㎜砲を装備して攻撃力は戦車に匹敵したが装甲は無きに等しかった。独ソ開戦直後、ドイツ軍を迎撃したBA-32はドイツ装甲師団の前に大損害を受け、1941年中には前線から後退した。

対戦車砲



◆37㎜対戦車砲

開戦時各国対戦車兵器の主力だった37㎜砲は、ドイツの37㎜砲をそのままコピーしたソ連のものは別にしても、ポーランド軍の使用したスウェーデン製の砲も米軍のM 3対戦車砲も当時最優秀とされていたドイツラインメタル社製の砲に大きな影響を受けていた。ドイツのものと同様これらも戦車の重装甲化の進展とともに旧式化し、大戦中期には第一線を退いた。

◆２ポンド砲

開戦時英軍対戦車連隊で使用されていた対戦車砲。他国が口径で砲を区別していたのに対して、当時の英軍は伝統にのっとって弾丸の重量を砲の名称としていた。２ポンド砲を他国ふうに言い替えれば40㎜対戦車砲となる。小型の砲ながら十字型の砲床を持っており360度方向の射撃が可能となっていた。対戦車砲として使用されなくなってからも装甲車の主砲として装備され続けた。

◆45㎜対戦車砲

ソ連軍は37㎜対戦車砲を更新するための装備として45㎜対戦車砲を選択した。この45㎜対戦車砲の外見は37㎜砲によく似ており、性能的にも37㎜砲とあまり差はなかった。戦争中期以降、ドイツ戦車の重装甲化の進行とともに45㎜砲は能力不足となり、後継の57㎜砲もまた威力不足だったため、戦争後半にソ連軍対戦車砲の主力となったのは野砲を転用した76㎜砲だった。

◆47㎜対戦車砲

開戦時フランス軍に装備されていた20㎜対戦車砲が少口径で威力不足だったため開発された対戦車砲。防盾を持たず、射撃時には車輪を半回転して上にあげ砲前面を防護するようになっていたのが外見上の特徴だった。当時、軽装甲だったドイツ戦車には充分な威力を持っていたが、この砲はほとんど配備されず20㎜砲も不足していたため、フランス軍歩兵がドイツ戦車に対抗する事はできなかった。

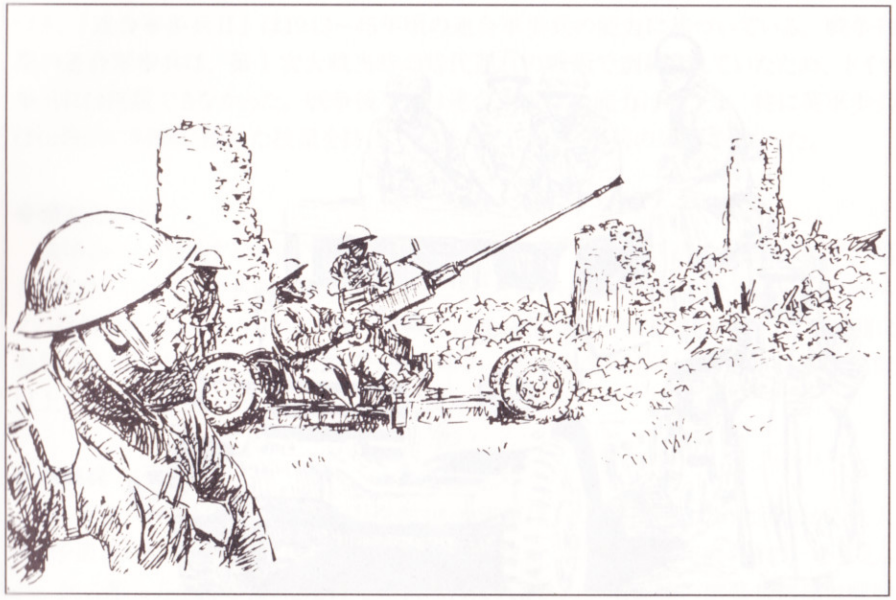
◆６ポンド/57㎜対戦車砲

英軍の６ポンド砲は1942年に来たアフリカで実戦に使用された口径57㎜の対戦車砲でタングステン弾頭の徹甲弾を使用すればタイガーにも対抗することができた。米軍はイギリスに提供する武器の見返りとして６ポンド砲の設計図を入手し、57㎜対戦車Ｍ１として生産した。ソ連の57㎜砲は1942年に登場した45㎜砲の拡大型で、ドイツ戦車の重装甲化の前に目立った活躍を示す事はなかった。

◆76㎜対戦車砲

ソ連の76㎜対戦車砲は野砲として使用されていたものを対戦車用に流用したもので、高初速のため炸裂音が発射音より先に聞こえる事からドイツ兵に「ラッチ・ブム（ドカン、ドンとの意味）」と呼ばれて恐れられた。米軍の76㎜砲は対空砲を転用したもので、英軍の17ポンド砲（これは最初から対戦車砲として設計された）とともに戦争後半、ドイツ軍重戦車に対抗するため使用された。

対空砲



◆90㎜対空砲

戦闘の進展にともなって戦車の重装甲化が進み既存の57㎜～76㎜クラスの砲は威力不足となったため、より大口径の砲を求めるようになった。その要求の解決策の一つとして、88㎜砲のような大口径、高初速の対空砲を転用することがあった。米軍の90㎜対空砲は威力からも地上攻撃に適していたが、この砲は地上目標に対してはほとんど使用されなかった。

◆40㎜対空砲

スウェーデンのボフォース社製40㎜砲は毎分120発の発射速度を持ち、低空目標の射撃に適した対空砲で、連合国だけでなくドイツ軍もこれをライセンス生産していた。特に連合国側はレーダーと連動した射撃指揮装置や近接信管を実用化して、対空射撃に大きな成果をあげた。生産開始後60年近く経過した現在でも、この砲は世界各国で使用されている。

兵員

◆騎兵

機関銃を始めとする火器の発達の結果、19世紀までは決戦兵種だった騎兵は戦闘に危弱な存在になっていたが、ポーランド騎兵がドイツ戦車を攻撃して全滅したことに示されるように、戦争初期には騎兵の戦闘力はまだ過信されていた。ソ連軍は終戦まで騎兵を使用したが、英米の騎兵部隊は名称こそ騎兵だったものの、実際には戦車や装甲車を装備した機甲偵察部隊に改編されていた。

◆空挺隊

空挺部隊は敵後方に降下して橋などの重要目標を占領し、地上部隊の進出までそれを確保するのが主要任務だった。しかし空輸のために軽量化された空挺部隊には戦車などの重装備が欠如しており、単独で長期間の戦闘はおこなえなかった。英米軍の空挺隊は降下猟兵の戦果に影響されて編成された部隊で、戦争中期以降に実戦に参加した。ソ連軍は戦前から空挺隊を編成していたが、戦争中にはほとんど一般歩兵として使用した。

◆連合軍歩兵Ⅰ／連合軍歩兵Ⅱ

連合軍の一般歩兵部隊。「連合軍歩兵Ⅰ」は1939～42年頃の連合軍歩兵の能力に基づき、「連合軍歩兵Ⅱ」は1943～45年頃の連合軍歩兵の能力に基づいている。戦争初期の連合軍歩兵は、第１次大戦当時の時代遅れの戦術で訓練されていたため、ドイツ歩兵には抵抗できなかった。戦争後半には連合軍歩兵の能力は向上し、特に英軍歩兵は伝統的に射撃に優れた技量を持つこともあって、ドイツ歩兵の好敵手となった。

◆機械化歩兵

機甲部隊に所属する歩兵部隊で、装甲ハーフトラックや装甲兵員輸送車を(英軍の場合)利用して戦車との共同作戦を実行することになっていた。しかし連合軍のハーフトラックの路外性能はドイツのものより悪く、実戦では機械化歩兵が戦車にしがみついて戦闘に参加することも多かった。また実際には英米軍の一般歩兵部隊もドイツ自動車化歩兵部隊以上の車両を装備しており、迅速な移動が可能だった。

◆懲募兵

独ソ戦初期だけで数百万の兵力を失ったソ連軍は、軍を維持するために少年から老人までを徴集した。彼ら懲募兵は軍服と一丁のライフル（時として戦死者のもの）を与えられ、銃の撃ち方を教えられただけで、戦場に投入された。未訓練の懲募兵部隊は戦闘で莫大な損失をこうむったが、モスクワやスターリングラードで当時世界最高の軍隊だったドイツ軍を敗北させたのは、懲募兵部隊の果敢な抵抗だった。

《ヒストリカルノート　スタッフ》

著者
堀内則明

編集
池尻賢一
知識計画

協力
石川淳一
前田良人

イラスト
小林源文

1991年12月　初版発行

SystemSoft 株式会社 システムソフト
アミューズメント事業部
〒810 福岡市中央区天神3丁目10-30